

令和6年度 活動実績報告書



SERI GAWA NO KAPPA



Supported by
日本財團
THE NIPPON FOUNDATION

独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業
WARM助成

Shiga, Hikone
Hanashobu-dori

もくじ

発刊によせて	01
食でつながる地域の居場所「みんなの食堂」	02
日本財団・子ども第三の居場所「みんなの食堂」	09
日本財団・子ども第三の居場所「みんなの食堂」モリウミアス編	19
令和6年度 滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業	25
誰にも会いたくないカフェ 遠信サロン	43
若者の就労を支える支援一相談事業	48
障がい児者計画相談支援事業	49
WAM助成 もっとみんなの食堂	50
統括・まとめ	55
資料	56



発刊によせて



特定非営利活動法人芹川の河童
理事長 **上田 健一郎**

昨年世間を大きく賑わせた事象として、東京都知事選の石丸伸二氏の躍進、兵庫県知事選における斎藤元彦知事の再選、米国大統領選におけるトランプ氏圧勝の選挙戦が挙げられます。従来のマスメディアがネットやSNSでの拡散力に屈したとも言われ、“オールドメディア”的な在り方が問われた2024年でした。このことと同様に、“オールド”と呼ばれる様々な存在が、今見直される時宜にきており時代の大転換期に入ってきているように思います。

そのようななか、近年は家族や家庭が抱える問題も複雑化しました深刻化しているのに加え、地域のつながりが希薄になり、安心して過ごせる子どもの居場所が少ないという大きな課題が続いています。このような社会課題に取り組みながら、「食」を通じて誰もが居場所にできる場所を地域循環型でつくりよう循環型未来食堂「みんなの食堂」の活動を継続しております。また、「生活が苦しくなったは自己責任」といった従来の“オールド”型から誰一人取り残さない社会への一助として、そして子どもの居場所づくりは地域づくりにもつながり、災害時には共助の基盤にもなるという考えを大事にして活動してまいります。これからも、食べるのも良し、提供するのも良し、それが地域を元気にするモットーに福祉には見えない“支援の輪”を広げてまいりますので、引き続きのご支援をお願いいたします。

花しょうぶ通り商店街のメンバーでもある特定非営利活動法人芹川の河童さんが運営されている地域循環型未来食堂「みんなの食堂」が開業5周年を迎えられました。成功するまちづくりに欠かせないのは、土の人(地域住民、商店街、自治会等)、風の人(コンサルタント、専門家、旅人、地元以外の人)、水の人(学生、行政、ネットワーク等)と繋がついて、火の人(焚きつけて行動する人)がいる町であると言われている。

まさに「みんなの食堂」さんは、商店街にあっても欠かすことのできない「風の人」達です。地域の外から情報、人脈、そして情熱の風を運んで来てくれいます。お弁当の販売や子ども第三の居場所の運営、子ども達、教育、特にヤングケアラー支援事業、健康に関する事、まちづくりに関する事などこの場所から今社会、地域の求めていること、自分がやりたいこと、自分にできることが可視化できる、さまざまな人たちが集まるプラットフォーム、居場所となっており、これからも芹川の河童さんの活動が地域の核として風の人から火の人として火種をさまざまな人たちに繋いでくれると期待している。

花しょうぶ通り商店街には「100の愚痴より10の提案よりの実行」というスローガンがあります。元気を届ける商店街としてご縁や伝建というバッグボーンを活かし大好きな共に連携させていただき地域を盛り上げて行ければと願っています。



花しょうぶ通り商店街振興組合
理事長 **和田 一繁**



特定非営利活動法人芹川の河童
代表 **川崎 敦子**

皆様、いつも当法人にご支援ご協力を頂き、ありがとうございます。

このように報告書が出せるのは、皆様の暖かいご支援のおかげであると思っています。

振り返りますと、今年度ほど多くの皆様に支えられて成り立ってきた法人であると感じたことはありません。

今年度の新たな取り組みとして、家族まるごと支援のための地域連携会議「もっとみんなの食堂」に取り組みました。重層的支援の地域づくりの分野ではありますが民間の団体である当法人が取り組むということは、大きな挑戦もありました。この会議には、多くの皆様が立場を超えて参加してくださいました。また、新たなプロジェクトが4つも始動し、ここまで短期間に達成できるということは、驚きがありました。

また、今年度は大きな目標を掲げて取り組んだ1年でもありました。認定NPOを目指すと決めたことです。認定NPOになるためには、賛助会員100名×3年を達成しなければなりません。今年度はその最初の一年でした。いつやるのかどうするのか考えているだけで11月になってしまいました。全員が力を合わせて頑張ろうと決めて、一か月で100名達成しました。

どちらも、多くの皆様の協力なく達成できません。間違いなく皆さんのおかげであります。感謝申し上げます。



循環型未来食堂

みんなの食堂

01 食でつながる地域の居場所「みんなの食堂」

食でつながる地域の居場所 1年間の報告

皆様方に支えられ、地域循環型未来食堂「みんなの食堂」は花しょうぶ通り商店街で開店して5年目となった。食堂の運営を支えてくださった皆様には、この場を借りて感謝申し上げる。

みんなの食堂の店長様は、現在13組おり、毎月15日程度、営業していただいている。また、毎週金曜日は「みんなのだがしや」、毎月第3火曜日は「みんなの保健室」を開室させていただいている。

横浜市のNPO法人パノラマの石井氏は「困ったときに公設の窓口に相談できるのは勇者だ」と言う。実際、困ったときに公設の窓口へ相談するのは非常にハードルが高く、なかなか相談しづらいものである。そのため子どもやヤングケアラーに関する支援などの福祉分野において、人と人がゆるく繋がりあえることは大変重要だと考えている。

食でつながる「みんなの食堂」は、入り口は店長様や第三の子どもの居場所であるが、必ず繋ぐことができる専門家がいることが、ここを利用する人に安心につながれば幸いだ。これからも皆様に親しまれる「みんなの食堂」をめざして活動していきたい。

(文責 山本 美穂)

地域循環型未来食堂「みんなの食堂」とは？

循環型未来食堂「みんなの食堂」は、地域のみんなと一緒に作る食堂です。生きづらさを感じている若者、孤食のお年寄りや学生、子育て中のママなど、誰もが居場所にできる場所を「食」を通じて作り出します。



競争や大量消費、大多数の求めるものを提供するのではなく、少人数の思いも取り入れられるような無形の価値を作ることが必要であると私たちは考えます。その無形の価値は、私たちと関わる全ての人・地域との共感から生まれると思います。そのためみんなの食堂は誰もが幸せと思える活動に取り組んでいきたいと考えています。

インスタグラムにて、最新情報お届け！

@minna.minsyoku

みんなの食堂(みんしょく) 検索



令和6年度 地域循環型未来食堂「みんなの食堂」営業日数、販売実績

《営業集計》

2025年1月31日現在

月	営業日数	定食販売数	お弁当販売数	お惣菜販売数
4月	15	32	418	120
5月	14	29	360	115
6月	10	22	261	63
7月	14	23	343	74
8月	11	22	312	46
9月	12	49	304	35
10月	20	39	399	75
11月	14	25	285	95
12月	15	17	302	75
1月	14	22	264	68
2月	15	12	174	58
3月	16	33	284	389
合計	170	325	3,706	1,213

アートフェスタ勝負市(6月9日)

- アイス・きゅうり 74個
- ポップコーン 68個
- だがし 147人分
- スーパーボールすくい 133人分
- スライム 63人分

夏休み支援弁当

各日15個
日程 7月22日、7月23日、7月24日、
7月25日、7月30日

コーナータウン発注オードブル

15名分、年3回

ヤングケアラー食事提供数(子ども食堂)

2025年1月31日現在

月	食数
4月	36
5月	51
6月	61
7月	103
8月	44
9月	75
10月	72
11月	70
12月	99
1月	71
2月	109
3月	120
合計	911



ほっとする場所をめざして

山本 美穂

今年度4月より、みんなの食堂に携わさせていただいている。何もわからない状態だったが、多くの方々の支えによって運営することができている。この場所で過ごしていると、人の温かさや地域との絆を感じる。

運営させていただく中で大切にしていることは、名前の通りこの場所が「みんなの食堂」であって欲しいということだ。いつも支えてくれる人がいて、運営する人も利用する人もみんなが安心できる場所であって欲しい。私はみんなの食堂が人と人を繋ぐ場所になればと思っている。

花しょうぶ通り商店街に位置するこの食堂は、自然と人が集い、様々な音が聞こえてくる。例えば、縁側に座っていると帰り道の小学生が「ただいま」と言ってくれたり、通りすがりの方がこっちを見て会釈してくれたりする。この食堂の良さの一つとして、なんだがひとりじゃないことを感じさせるところがよいと感じている。現代社会が忘れてしまった日本の豊かさがここには存在する。

この魅力を活かして、店長様が生き生きと運営することができ、老若男女問わず、子どもから高齢の方まで誰もが安心でき、人が集まる場所を、みなさまの声を聞きながら築いていきたい。

大一大万大吉

LLPひこね街の駅駅長 小杉 共弘

少子高齢化やライフスタイルの変化により衰退する商店街に於いてみんなの食堂の活動は学校に行けない子供たちだけでなく今や地域にとってもかけがえのない施設として街のランドマークとなっています。

子供達にとって安心できる居場所は温かい食事だけではなく、落ち着いた空間で時には宿題や勉強のサポートも可能です。

古くて小さな商店街ながらクラフトマーケットやワークショップ等のイベント活動を通じて商店街や地域の人と触れ合うなかで社会との繋がりを学び子供たちが成長できる機会が生まれます。我々世代が育った時のように困っている子供がいたら気にかけ、話を聞くなど地域ぐるみで子供たちが安心して過ごせる場所や人とのつながりがあれば、未来に向けて成長できます。

「大一大万大吉」

みんながひとりの為に、ひとりはみんなの為に…

みんなで協力して少しでも、孤立を防ぎ子供たちを支えていける街や社会を作っていくればと願っています。

「ごはん」でつながる地域の居場所

滋賀県社会福祉協議会
地域福祉課 主事 三宮 千香子

滋賀県内には、2024年12月末で224か所の子ども食堂があり、その活動形態・開催頻度・参加人数は子ども食堂によって様々である。しかし、どんな子ども食堂でも共通しているのは「ごはんを通じて地域ぐるみで子どもを見守り育していく、垣根のない居場所」という思いである。

特定非営利活動法人芹川の河童（以下「芹川の河童」）では、制度の狭間にあり支援がしづらかったひきこもりや生きづらさを抱えた若者の「ごはん」でつながる地域の居場所（コミュニティカフェ）を作りだしている。

コミュニティカフェは相談や支援の入口となり、様々な地域の困りごと・課題に対して、行政関係機関へとつなげるなど重要な役割を担ってきた。

地域共生社会の実現に向けて、このえにしを大切にし、私たち滋賀県社会福祉協議会も芹川の河童の取組を応援していきたい。



みんなの居場所

wa.U 田村 ゆう子

みんなの食堂の店長を始めてからもうすぐ2年が経とうとしている。初めはお弁当をぱっと購入される方が殆どだったが、「中で食べれますか?」と店内飲食をされる方も増えてきた。きれいに召し上がって下さって感想も聞けて嬉しかった。

最近はお米や野菜の高騰の中、ボリュームも変わらないように創意工夫しているが「お野菜も沢山とれて嬉しい、ありがとう」とのお声に私自身が沢山励まされている。

またヤングケアラーさんや夏休みのお子様への食事提供をさせていただき、子供さんに向けて作ることに食材を工夫し、楽しくやりがいを感じている。

楽しみに来て下さる方に感謝を込めてこれからもみんなの居場所になるような食事提供をしていきたい。



心あたたまる居場所に

弁ちゃん堂 佐々木 悅子

みんなの食堂はいつもあたたかい居場所だ。それは普通の飲食店では味わえない人の心が動く場所。誰かのために誰かが動く、そこには料理という一つの形がある。

私たち店長はいつもこの地域からいただくフードロスを使わせていただく。その野菜などを提供してくれる人がいる。そして地域の人にお弁当やランチという料理でご提供する。食べるのが困難な方には、誰かがその人のために出してくれた「恩送り券」で料理を食べることが出来る。

そんなことが実現できるのは、みんなそれぞれの心が動くからだと思う。私はその中で、この地域循環型未来食堂～みんなの食堂～で料理できることが嬉しい。

食堂だけじゃない、15時からは子どもの居場所がはじまる。子どもたちの夕ご飯も作させていただいている。子ども達とみんなが食卓を囲んで過ごされることは、また、おうちとは違ったあたたか味があるようだ。そこにも料理は存在する。普段は料理の先生として活動しているが、みんなの食堂ではいろんな方のあたたかさを感じた料理が出来上がるるので、私自身も心があたたまる居場所だ。



食べた物が身体をつくる

夢のたまご 佐々木 貴代

夢のたまごとしてみんなの食堂で店長をさせていただき、5年を迎えようとしています。

店長をはじめたきっかけは、食べることで健康な身体づくりを応援したいという想いからでした。現在は、「目指せ1日30品目」とたまご料理を主に、まごわやさしいランチ(弁当)を作っています。

まごわやさしいランチとは、まー豆・ごーごま・わーわかめ(海藻類)・やー野菜・さー魚・しー椎茸類・いー芋類という食材を使ったランチです。

お家でも簡単に作れる品を提供することが多いので、お客様から作り方を質問されることがあると、その時はとても嬉しく思います。たまに、お弁当のフタが閉まらない…ということもありますが、これからも皆さんの健康づくりをお手伝いさせていただきます。



初出店から1年を迎えて

Puoli 西村 美甫

みんなの食堂で営業をさせていただくようになり約1年が経つ。毎回自身のInstagramに出店のお知らせしているのだが、たくさんの友人達もお弁当を買いに来てくれた。特に喜ばしい出来事は、それをきっかけに20年ぶりの友人と再会できた事である。『"SNSではやり取りがあるけれどなかなか会う約束には至らない"そんな友人達ともまた顔を合わせて話すことが出来る窓口があれば…』そんな思いが叶ったのはこの場所があったからこそで本当にありがたい事である。

また、フードロスのお野菜を使わせていただく事で普段食べ馴染みのないお野菜を調理できる事も自身にとって良い経験になっており、お客様とのお話のきっかけにもなったり、次回来店時にそのおかげの感想をいただいたりと、この場所ならではのコミュニケーションにも繋がっている。

本当に実りある1年であったと感じているので、活動のなかで感謝を返していきたい。



つなぐ

八十八日 上林 英美

心と身体が元気になるお弁当作りを心掛けています。私は、百貨店でコーディネーターをし、婦人服の会社でMD、バイヤー、新人教育をしていました。沢山の人と接していると、食べる物って大切じゃないのか?と思う様になり、仕事を辞め、農業をし、ベジタブルフルーツマイスターの資格を取り、マクロビオティックを学び実践しました。そのおかげで疲れにくい身体になり、子育ても楽しめ、風にも負けない丈夫な子供に育ってくれました。

伝統的な製法で作られた調味料、地元の食材、季節の野菜を使って皆様の健康作りのお役に立てればと思ってお弁当を作っております。

みんなの食堂さんでヤングケアラーの事を知り、一緒に食べて貰う夜ご飯作りにも携わらせて頂いてます。

食べる事で人と人が、繋がることが嬉しく、会話が生まれる様なメニューを考え、楽しい時間を過ごしてもらえたらいいなと思っております。





食堂ボランティアとしての役割

ボランティア 森 恵子

私がみんなの食堂ボランティアに参加するようになって早5年目を迎える。店長のお手伝いとして、主に開店準備とお弁当を詰める役割をしている。自分の空いた時間に、行ける時だけの「スキマボランティア」だが、少しでも店長のお役に立てればと思い続けている。

今年度は、野菜運搬にも携わらせてもらい、フードロスの野菜たちが店長の腕で美味しい料理に出来上がっていく様子が見られるのもボランティアの特権である。今年度は、近所のママ友を食堂ボランティアに誘い「料理の参考になった、楽しかった」と喜んでもらえた。私のボランティアとしての役割は、誰かの役にたてることである。

地域商店街からみたみんなの食堂

近江牛専門店こにし本店 小西 久子

伝建地区に2020年に誕生したみんなの食堂は、地域の住民の方々と協力して、お互いに良好な関係にあります。

子どもたちや若いお母さんたちが集う場所であり、花しょうぶ商店街にとっては年々人通りが減ってしまっている状況ですが、今後もよりいっそう地域に密着した催事などを通してお互いに活性化することを願っています。

お手伝いできることができれば声を掛けて頂き小さなことから始めて大きな力になれば嬉しいです。



こんにちは。パリヤ P マート店長の阪東龍也です。みんなの食堂さんへの食材提供活動。まだまだ食べられる食材なのに、まだまだ新鮮なのに、行き場がなかった野菜たちがおいしい料理に生まれ変わって、地域のために活かせることができ大変うれしく感じております。

考えてみれば、みんなの食堂さんとの取り組みがきっかけで、私たちパリヤは地域に対する考え方や取り組みの方向性がその後大きく変わっていましたと感じています。

2020年3月からスタートしたみんなの食堂さんへの食材提供。その年の6月には社会福祉協議会さんと連携しフードバンクボストの設置、さらに地元ボランティア団体さんと連携し制服回収リサイクルボスト設置など地域と繋がりがより強くなっていました。そういう意味でも、地域貢献を考えるきっかけを与えてくださったみんなの食堂さんには本当に感謝しなければなりません。

これからも「食」を通じて微力ながらもご協力させていただきます。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。



株式会社パリヤ
店舗運営部長兼 P マート店長
阪東 龍也

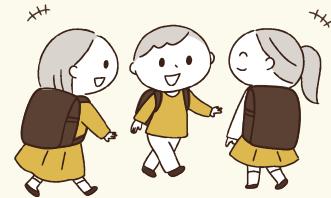
02 日本財団 子ども第三の居場所「みんなの食堂」

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

子ども第三の居場所とは

すべての子どもたちに、安心できる居場所を

家庭が抱える困難が複雑・深刻化し、地域のつながりも希薄になる中、子どもが安心して過ごせる居場所がなく、孤立するケースは少なくありません。日本財団は、すべての子どもたちが未来への希望を持ち、安心して過ごすことができる「子ども第三の居場所」を設け、全国へと拡げていきます。この居場所が地域のハブとなり、子育てコミュニティが生まれることで、「みんなが、みんなの子どもを育てる」社会を目指します。



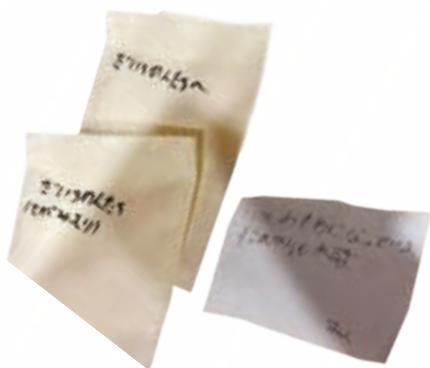
引用元：子ども第三の居場所 | 日本財団 <https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/child-third-place>

日本財団の子ども第三の居場所を開設して、今年で3年目になる。日本財団の助成金のおかげで、本当に多くのことができた。

モリウミアスは象徴的なプログラムの一つだが、まだまだ日本財団の助成金のおかげでできることはたくさんあったが、今年度は助成金最終年度である。この三年間試行錯誤して自立の道を探ってきた。来年度どうするのか、本当に大きな課題であった。子どもの居場所事業への移行は、法人所在の行政の財政事情のためかなわなかった。したがって来年度からは、子ども第三の居場所の開設は当法人の自己努力ということになる。

三年前は子どもの利用が増えず、どうしたら子どもたちが利用してくれるのかと考えていたが、現在は多くの方々に認知され一日の利用人数が15人くらいになるときもある。子ども第三の居場所を必要とされている方が増えていることを、認識している。助成金がないなら閉鎖するのかという葛藤はあったが、保護者からは「なくなったら困る」「何とか続けてほしい」という切実な声を多くいただいた。そこで法人としては助成金がなくなても、続けていくことを決めた。

また、子ども第三の居場所は、大学生の学生リーダーが中心に運営してたが年々大学生の参加も増えてきたし、誰にも会いたくないカフェから就職の一歩としてアルバイトを希望する若者も参加するようになった。毎回、振り返りをのためのデスカッションをしているが、大学生も若者も全員が意見を出し熱心に話をする姿が見られる。時々来る高校生も物おじせず話している姿はたくましくもあり、学生たちの力に感心させられる。月に一回は滋賀県立大学の松嶋教授にご意見を頂き、この内容は学生や若者にフィードバックされる。



このような現場での試行錯誤こそが、発達支援の真の姿ではないか感じている。

(文責 川崎敦子)



子どもを支える人を支える場

滋賀県立大学人間文化学部教授
教授 松嶋 秀明



毎回の活動では、専従のスタッフはもちろんだが、大学生スタッフのみなさんの力が大きい。大学生スタッフの強みは、いわゆる「斜めの関係」すなわち、親でも子ども同士でもなく、少し経験をもつ立場として、押し付けがましくなくリードしたり、見守ってくれたりする存在でいられることがあるだろう。そういう存在だからこそ、活動中のふとしたところで子どもの普段はみられない、いろんな姿、声を目撃することができる。

とはいって、斜めでいるのは難しい。時には、自分の関わりはこれでよかったのだろうか、もっと注意した方がよかったのだろうかと不安になることもあるだろう。大学生スタッフのなかには、自分にとってもこの場が居場所であると感じる人が多くいるということを最近知った。そのように支援する人自身が支援されているという雰囲気があるからこそ、大学生スタッフが安心して活躍できるのかもしれない。これはこの居場所の強みだと思う。

令和6年度 子ども第三の居場所「みんなの食堂」活動実績

令和6年4月1日～令和7年1月31日まで

利用登録者数

内訳	未就学児	小学1年生	小学2年生	小学3年生	小学4年生	小学5年生	小学6年生	中学生	高校生	※4名未確認
人数	8	3	6	7	13	6	7	7	1	

登録者学区

学校別	城東小	旭森小	佐和山小	高宮小	城南小	河瀬小	平田小	東中	南中	その他
人数	6	3	15	6	9	4	3	1	3	3

職員体制

内訳	常勤	非常勤	学生	アルバイト	ボランティア	その他
人数	2	3	10	3	14	4

開催回数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
12	11	12	13	8	11	10	11	11	8	11	13

登録人数……… 62名

開催日数……… 131日

利用人数… 延べ682名

子ども第三の居場所「みんなの食堂」は、 お子さんの『できた！』を増やします。

子ども第三の居場所は NPO 法人芹川の河童と彦根市が協定を結び、日本財団より助成を受けて運営を行っています。

城東小学校、佐和山小学校、彦根東中学校のお子様は学校帰りにご利用可能。また、保護者送迎を行っていただけるご家庭はお住まいに関係なくご利用いただけます。

お子さんがのびのび成長する、
さまざまな体験プログラムを
ご用意しています。



体験プログラムの最新情報・体験の様子はInstagramからご覧いただけます。

@kodomodai3_ibasyo

子ども第三の居場所 - 利用案内 -

毎週 月 水 土 に開設しています。

利用料金

事前予約制 1回 200円

事前に10回分の回数券を購入してください

利用料金は、活動の保険などに当てられます。体験に関しては別途材料費などがかかります。

*児童扶養手当や就学援助を受けているご家庭は無料でご利用いただけます。

利用人数

1日あたり 15名 まで

法人責任者、主任指導員、大学生リーダー等、みんなの食堂マネージャーで、お子様の活動を見守ります。

親子参加もお待ちしております

日々の生活や子育ての悩みなど、不安を抱える親御さんのお話を担当スタッフがお伺いします。

利用時間

最大 15:00～19:00 まで

自分で通える子どもは15:00～17:00まで、送迎可能なご家庭の子どもは 15:00～19:00まで利用可能です。



令和6年度 子ども第三の居場所 体験プログラム 開催実績

実施日	内容
4月6日	お花見に行こう
4月13日	プラパンでいろんな作品を作ろう
4月20日	新しいボードゲームで遊ぼう
4月27日	カブトと剣を作ろう
5月11日	万華鏡を作ろう
5月18日	まちを作ろう
5月25日	メロンパン作り
6月1日	アートフェスタの準備をしよう
6月8日	アートフェスタを楽しもう
6月15日	クッキーを作ろう
6月22日	ステキな傘を作ろう
6月29日	マスキングテープで工作をしよう
7月6日	流しうめんをしよう
7月13日	ゲーム大会
7月20日	牛乳パックでカエルを作ろう
7月27日	ヨーヨーを作って遊ぼう
8月3日	自分のコマを作って遊ぼう
8月17日	高取山ディキャンプ
8月24日	自動販売機を作って遊ぼう
9月7日	スライム作り
9月14日	カラーゴムアクセサリー作り
9月21日	巻き巻き体験プログラム（むすびえ×日世）
9月28日	みんなで看板を作ろう
10月5日	お店を作って遊ぼう
10月19日	片栗粉スライム・スクイーズを作って遊ぼう
10月26日	オレンジリボン運動に参加
11月2日	バルーンアート（レイカディア大学ボランティア）
11月9日	彦根城一金龜公園へ行こう
11月16日	お金のお話（明治安田）
11月30日	みんなの食堂のクリスマスツリーを作ろう
12月7日	かるたを作って遊ぼう
12月14日	ステキな宝箱を作ろう
12月21日	クリスマスパーティー
1月4日	ひこキャン
1月18日	お正月遊び
1月25日	ししまいを作ろう
2月1日	ギョーザパーティー
2月15日	バスボム作り
2月22日	ひなまつり顔出しパネルを作ろう
3月1日	ねりけしを作ろう
3月8日	カルメ焼きを作ろう
3月15日	カレンダーを作ろう
3月22日	第1回大かっぱまつり
3月29日	たこ焼きケーキを作って食べよう



体験プログラム開催の様子＆参加した子どもたちのコメント





学生リーダーの声

子どもの関心に関心を持つこと

学生リーダー 小原 和真

学生リーダーとして子どもと関わっていると、子どもの関心ごとの多様さと知識の深さに気付かされる。ちいかわ、ボカロ、スマブラ、MCバトル…etc。子どもにはそれぞれの世界があって、その中では大人よりも知識を持っていることがままある。

子どもの好きなことに興味を持ち、少し検索してみたり、やってみたりするだけで子どもとの会話が広がり、聞けなかったかもしれないかった話が聞けたりする。人と関係性を構築するには、相手が何に関心を持っているのかに関心を持つのが大切だと感じた。関係性を構築し、子どもが自分の考えを持ち、それを表明できる可能性に開かれた場を作るのが学生リーダーの重要な役割だと思っている。私もこの役割に少しでも貢献できていたら嬉しい。大学2年生の冬から始めた第三の居場所でのアルバイトも今年で2年になり、大学卒業とともに学生リーダーとしての活動も一区切りとなる。今後の学生リーダーたちが子どもに寄り添い、信頼される関係性を築いてくれることを期待したい。

学生リーダーでの活動を通して

学生リーダー 瀧川 恭平

私は子どもたちと関わる中で様々なことを経験し学んだ。初めて来たときは緊張していたが、子どもたちはすぐに打ち解け一緒に遊び、活動をする中でたくさんの笑顔を見ることができた。

慣れてくると学生リーダーとしての役割を意識できるようになった。プログラムをしていく中で子どもたちは案外興味を持たないものが多いことに気づいた。しかしやってみると面白く、ハマることもあった。そこで、まず自分が楽しみながら取り組み、これは楽しい、面白いことなのだと示すことを心がけた。

子どもたちと接する中で、私は子どもたちの成長力に驚かされた。以前はできなかったことができるようになったり、喧嘩になりそうなときに自分たちで話し合いができるようになっていた。

子ども第三の居場所は自己表現ができる場を提供する大切な時間であると感じている。今後はこれまでの学びを生かしつつ、子どもたちと共に成長していくようにしていきたい。

子どもたちの拠り所として

学生リーダー 前田 友晴

私は10月より、子ども第三の居場所で学生リーダーとして働いている。第三の居場所では、主に子どもたちの相手をするのが仕事だ。新参者ということもあり、入った当初は子どもたちと仲良くできるか不安であった。実際長く勤めている先輩とは違い、子どもたちに警戒感を抱かれているのでは、と感じたことがあった。

しかし、勤めて4か月となった今となっては、ある程度子どもたちに認めてもらえた感じがする。子どもたちと交流を交わす中で、遊びに誘われたり、頼られたりすることが多くなった。もちろんこれに満足することなく励むつもりではあるが、第三の居場所に来る子どもたちの拠り所の一つとなることができているのなら、うれしいと思う。

第三の居場所に来る子どものなかには、複雑な事情を抱えた子もいるので、そんな子に寄り添える存在でありたいと思う。これからも学生リーダーとして活動を続け、楽しいと感じてくれる子どもが一人でも多くなるよう努力していく所存である。

第三の居場所で学んだこと

学生リーダー 上野 雅之

私は中学生の頃から学校の教員になる夢を持ちながら過ごし、就職先も通信制の高校になった。大学では教員生活に活けるバイトをしたいと思い、塾講師や学童保育等のバイトをしており、その中で第三の居場所を知り素敵な経験を多くさせていただいた。

学童保育は規則を守って貰えるように、または他の生徒とコミュニケーションを学ぶ場であると認識しており、"叱る事"や"教える事"を主として活動したが、第三の居場所では危険がないように"見守る"という事が重要であると気付き、日々考えながら活動している。

第三の居場所では、職員や他の子ども達と共に食やプログラムを通して様々なファーストステップを踏む場所であるという認識に変わった。活動の中には楽しい事だけではなくシビアな問題もあり、頭を悩ますシチュエーションもある。その問題の皺寄せが幼い子ども達に向いてしまうのは避けるべき事で、第三の居場所は子ども達に、また大人にとっても大切な環境だと改めて思った。

すぐに問題が解決するわけではなく、未来に向けて種を撒く様な活動であり、今後の教員活動にとって大変有意義な学びになつたと感じており、これらを活かして今後の活動に繋げていきたい。

アルバイト ボランティア の声



第三の居場所で働いて感じたこと

アルバイト 中邑 勇治

子ども第三の居場所でアルバイトをして感じたことは大きく分けて二つある。

一つ目は子どもを相手に仕事をするのは大変だということである。まず子どもの顔と名前を覚えなければいけない。今でもたまに子どもの名前を間違えてしまう時がある。そして子ども達と遊んだりするのは疲れる時もある。鬼ごっここの鬼をずっとやらなければいけないときもあるからだ。それから子どもに何か注意するということが個人的に苦手である。命に関わることは全力で止めないといけないと言われているのでなにかあったら動かないといけない。もちろん予想できる範囲で予防したりはしている。

二つ目は第三の居場所で働けて良かったと思うことである。それは第三の居場所で働いていて子どもと遊ぶのはもちろん疲れる時もあるが基本楽しいからだ。そして子ども達が楽しそうにしていたり美味しいようにご飯を食べているのを見ると本当に第三の居場所で働けて良かったなと感じるのだ。

WakuWaku DokiDoki やったー！

ボランティア 西山 直美

工作教室で大切にしていることは、

- ①ワクワクドキドキやってみたー つくってみたー！
- ②うまくできないなー、でもがんばろう！
- ③こうしたらどうかなー、試してみよう！
- ④あともう少し 続けてみよう！
- ⑤友達と一緒にやるって楽しいなー！
- ⑥ほめてもらってうれしいなー！



などと様々に、子どもたちが心を動かせることである。

子どもたちが様々に心を動かせ、豊かに表現を楽しむことは、子どもたちが心豊かに生きる力を育むことにつながると考え、これからも表現活動（工作教室）に力を注ぐよう努めていきたい。

子ども第三の居場所

アルバイト 脇阪 志津子

わたしは、子ども第三の居場所で食を通して、はじめて子どもと関わる仕事をさせていただきましたが、しっかりご飯を食べるということは、とても大事なんだなと思いました。その中で店長様たちには、いつも美味しい手作りのお料理を提供していただき、ありがとうございます。

色々な事情で、なかなか家庭でしっかりご飯を食べられない子ども達もいるなかで、本当にありがとうございます。子ども第三の居場所が続く限りお願いいたします。また私にもいろいろお料理を教えて下さい。ありがとうございます。

子どもたちの力を伸ばす場

アルバイト 藤本 侑治

私は高校三年生の夏頃から子ども第三の居場所でアルバイトをさせていただいている。始めはただ、子ども達とお話をしたり食事をするだけだと考えていた。しかし、実際に第三の居場所で活動をしてみると、ここでは普段出来ない体験などを通して子ども達の普段見られない姿を見れる場もあるのだと感じました。

特に私がそう感じさせられたのは、日生株式会社さんの御協力のもとで行われたソフトクリーム作り体験である。この体験では大人が子どもを止めないというテーマもあったため、子ども達は普段よりも自由に活動することが出来た。

また、このような活動には大人も子どもたくさんの人人が参加するので、コミュニケーション能力の向上にも繋がるのだと気付かされた。

これらの活動を通して私は、子どもの居場所とはただ食事する場所ではなく、普段子ども達が出来ない体験をすることにより、子どもの力を伸ばす場もあるのだと感じた。

＜今年度の工作教室＞

2024年5月 住みたい街を作ろう

6月 オリジナルの傘を作って散歩しよう

7月 ヨーヨーを作って遊ぼう

8月 自動販売機を作ってお買い物をしよう

9月 イベントの看板つくり

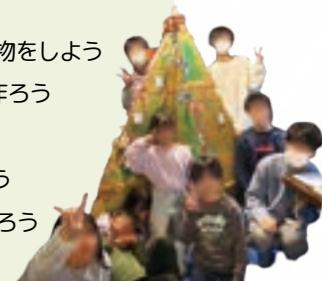
10月 祭りの屋台を作ってお買い物をしよう

11月 大きなクリスマスツリーを作ろう

12月 自分だけの宝箱を作ろう

2025年1月 しまいを作って街に出よう

2月 ひな祭り顔出しパネルを作ろう





「体験と学習」

～ソフトクリームは子どもたちの笑顔のみなもと～

日世株式会社 びわ湖工場
技術保全課 所属長 村上仁宏

近年、多様化する社会課題に対応するため、企業として環境問題に目を向け、子どもの居場所でソフトクリーム工場の食品ロス削減や環境問題への取り組みについて伝える活動を、各地の子ども食堂や子どもの居場所で、体験と学習をテーマに『ソフトクリーム巻き巻き体験』をお届けしています。実際に自分たちで巻いたソフトクリームを食べて、美味しく楽しく学ぶことで、子どもたちの記憶にずっと残ると感じています。

また、この体験を通じて、子どもたち自身も社会課題の解決に向けて一緒に取り組んでいることが伝わると嬉しいです。子どもたちのアイデアを直接聞くことで、私たちは社会課題解決に向けた広い視点を取り入れ、子どもたちが健康で幸せに暮らせる社会を実現するために、ソフトクリームの力で明るく希望ある未来を目指しています。



明治安田の『サステイナビリティ』

明治安田 彦根営業所一同

明治安田は2024年度から開始した3ヵ年プログラムで「生命保険会社の役割を超える」ことをめざしている。

「生命保険会社の役割を超える」という言葉には「保障とアフターフォローの提供」という生命保険会社の従来の役割を大切にしながら、2「大」プロジェクト（「みんなの健活プロジェクト」「地元の元気プロジェクト」）の取組みを強化することで、「ヘルスケア・QOLの向上」と「地域活性化」という2つの方向にさらに役割を拡充していく、という強い想いが込められている。

今回我々は「持続可能で希望に満ちた社会づくりに貢献していきたい」という考え方のもと、「みんなの食堂 子ども第三の居場所」での『ごはん作り＆子供たち向けへの金融・保険教育』をさせていただいた。「何かできることはないか」という考え方から彦根営業所の社員たちが考え実行した。今後さらにこの活動が多岐にわたるようにしていきたい。

アストロゼネカ社アジアチームと交流

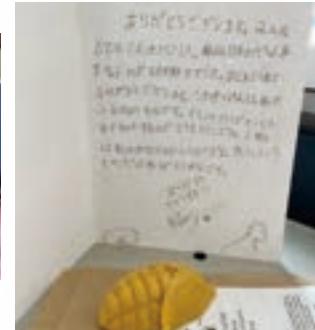
4月10日、アストロゼネカ社アジアチームと交流しました。イギリス人のチームリーダーをはじめ、中国、韓国、インド、オーストラリアの方々とたこ焼きや焼きそばを作ったり、子どもたちと一緒に折り紙をしました。各地のお菓子もお土産にいただき、みんなで異国の味を体験しました。



ミシガン州立大学大学生実習受け入れ

令和7年1月、ミシガン州カラマズー大学で人類学と社会学を専攻されている学生が4日間の実習に来られました。

実習では、子どもたちと遊んだりご飯を食べたり、モリウミアスにも参加したりと様々な体験をしてくださいました。実習後は、お礼のお手紙もいただきました。



みんなの駄菓子屋の開店について

川崎 こういち

以前より「子ども第三の居場所」の開設日を増やしたいという思いが運営を行なっていく中でありました。「みんなの食堂」という枠組みがある中で子どもだけ無く大人も来てもらえる物は何かと考えて駄菓子屋なんかいいのではと意見が出ました。丁度6月に商店街のイベントがあり、「みんなの食堂」では縁日を行う事が決まっていたのでそこでやってみようとなりました。駄菓子屋はすごく盛況でこれはやれるのではと自算がたちました。



開店日を「第三の居場所」をやっていない金曜日の15時半から17時半と設定し担当を若者サロンに来ている人から募り7/25からお試しで開店しました。その後、毎週開店して近所の方、近くのお店を利用した方、通りがかりの方、第三の居場所の参加家庭と一定の来客があります。しかしながら認知度は低くどうやって知ってもらうかが今後の課題です。

とりいもと祭りや若者サミット、ライブの出店を行うとどれもが盛況です。通信サロンに置き菓子も行なっており、それも盛況です。目に留まる事が有れば覗いてもらえる事は実感できるのでこれからも積極的に出張駄菓子屋を行って行きたいと思います。

みんなのだがしや 始動中

岩噂 みゆき

ポスター作成・値付け・値段表作り・買い出し・お祭り、学童への出張出店…今まで携わったことのない分野ということもあり、店長や仲間と共に毎週、相談しながら営業している。まだまだ手探りなところがあり、店内のレイアウトや必要なもの…どうやったらお客様に認知されていくのか…日々、色々考えながら営業していくのは大変だが、楽しくもありとても充実している。

学童に出張駄菓子屋として赴いた際には「面白い!」と感じたこともあった。子どもたちの「欲しい!」と思う駄菓子が地域によって変わってくるということだ。好みもあるのだろうが、よく売れる商品がかなり違ったのでとても驚いた。また、最近は許可をもらい「置き菓子コーナー」を作らせてもらった。

このように、一般のお客様にも手軽に駄菓子を買いに来てもらえるよう、少しづつでいいから「みんなのだがしや」を知ってほしいと思う。そのための努力は怠らないよう、これからも活動していきたい。

みんなのだがしや

アルバイトスタッフ 細江 美希

昨年の夏から始まった「みんなのだがしや」には、お店の準備段階から携わり、一緒に働く岩噂さんと相談しながらポスター作りやお店に必要なものなどの準備をした。

営業が始まって半年ほど経ったが、多賀と篠原の学童で出張だがしやを実施したことが特に楽しい思い出になっている。たくさんの子どもたちがキラキラした笑顔で話しかけてくれ、「みんなのだがしや」もそんな風に子どもたちが楽しくお菓子を食べたり、店員と話したりする場所にしていきたいと思いを強くした。そして、子どもだけでなく、おとなも懐かしい駄菓子で一息つける空間にするのが目標である。

今年からは通信サロンで駄菓子の置き菓子や「みんなの雀荘」にお菓子の詰め合わせを置かせていただくなど、お店以外でも多くの人に関われるように取り組み始めた。これからも地域の人たちの居場所になれるよう工夫と努力を重ねていきたい。

(だがしやを利用した人の声)

日中一時支援なかま～ず彦根
宇野直美

金曜日開店のだがし屋を利用して、回数を重ねる毎に金曜日の利用者さんは来所時、「今日だがし屋さんへ行く?」と楽しみにするようになった。買い物の金額は決まっているので自分で計算したり、指導員に聞いたりしながら嬉しそうに自分の好きなおやつを選んで購入する姿が見られる。

最近は買い物をする際、セルフレジを利用する事によって人と会話をしなくても買い物が出来る。しかし、だがし屋では人との会話を通してやりとりが出来ることが大きな利点だと感じる。「これはいくら?」「これはどんな味?」「前買った〇〇は、もう売り切れ?」等という質問にも丁寧に対応してもらっている。人ととの触れ合いが大好きなおやつ購入を通して出来ている事に感謝する日々である。



学童に「みんなのだがしや」さんがきた！

園山 美恵

当法人の下部団体では、近江八幡市に民設で2つ、多賀町で公設の放課後児童クラブ（通称学童）を運営しており、300人近い子どもたちを預かっている。

毎年、夏休みには子どもたちが楽しみにしている「夏祭り」があり、この目玉の1つとして、今年は「みんなのだがしや」さんに出張してもらった。

決められた金額内で、いかに自分で選んだお菓子を多く買うのか？

暗算や電卓で計算する人、質より量や数で選ぶ人、友人のお勧めを買う人など様々だった。

見て・選んで・買って・食べてと4つの楽しみがある出張「みんなのだがしや」さん、次のお越しをこころよりお待ちしております。



子どもの居場所への送迎サポートし、子どもが通いやすい環境を整えています

子どもたちの楽しみのひとつである居場所

社会福祉法人彦根市社会福祉協議会
地域支援課 谷澤 友美

「はぴとも号」は、地域の居場所へ参加したいけど、さまざまな理由により移動手段が確保できない子どもへの支援として、子ども食堂や学びの場など、地域における子どもへの居場所への送迎をサポートしている。

子どもたちが多くの参加や交流、学びや体験を得られる機会・経験を増やすことで、子どもの幸せへつなげていくことを目的にしている。

「子ども第三の居場所」は、家や学校以外の自分らしく安心していられる居場所である。送迎ボランティアのおじさんたちが自宅まで迎えに行くと子どもたちは嬉しそうに出てきて、車内では「今日は〇〇がある！」と居場所での予定を楽しそうに話してくれる。居場所に到着すると車から飛び出していく子どもたちを慌てて制止するおじさんたち（笑）。

子どもたちが楽しく安全に居場所に行けるよう「はぴとも号」は今後も居場所を支援していきます。

車のアイコン
はぴとも号



日本財団・子ども第三の居場所「みんなの食堂」 MORIUMIUS -モリウミアス編-

森と海と明日へ

豊かな森と海に恵まれ、自然風景と伝統が色濃く残る石巻市雄勝町。東日本大震災によって町の8割が壊滅してしまいましたが、地域の復興への想いから、高台に残る築93年の廃校が新たな学び場として生まれ変わりました。それがモリウミアスのはじまりです。

モリウミアスは、こどもたちの好奇心と探究心を刺激する複合体験施設です。暮らしと自然が共存する環境を学び、それを活かしたアクティビティや多種多様な交流を通じて、たくましく生きていく力が湧いてくる。こどもたちが自然と向き合って多くのことを学ぶように、街を訪れる人たちとの交流は雄勝町がより豊かに育ってゆくためのきっかけにもなります。

こどもたちと地域の明日をつくるために、モリウミアスは新しい出会いを生み出していくます。

引用元：モリウミアスについて | <https://moriumi.us/about/>

食を通して自然と人と関わる。日本財団が提供するモリウミアスプログラムに取り組んで、今年で2年目になる。

内容は、オンラインプログラムと現地プログラムの2つのプログラムから構成される。

オンラインプログラムは、「自然と暮らしの循環」を体感する目的で、全国で、24拠点が参加。月に1回モリウミアスのある宮城県石巻市雄勝町から届く旬の食材を使って調理にチャレンジし、料理を仕上げる。オンラインプログラムは、「学ぶパート」と「調理パート」の2つで構成されている。2年目である今年は、さらに内容も調理工程も増え難くなっているが、昨年から取り組んできた子どもたちには難なくこなせていたようであった。むしろ、昨年よりスタッフの手を借りずしてできたように思える。おから味噌の調理の際には、子どもたちがおからをまき散らし部屋が真っ白になつたが、その中でも仕上がっていったのはすごいと思った。

現地プログラムは、2回目の参加の子どももいて初めて参加する子に「楽しい」と話してくれていたのが印象的であった。現地では、動物の世話、山や海へ行く、調理など様々な体験をしている。昨年仲良くなったニワトリとの再会を楽しみにしていたが、「1羽もいなかった」「動物に食べられた」と話してくれたMちゃん。自然の驚異も学べたのだと感じた。

このような取り組みを通じて、子どもたちは確実に生きる力を育んでいる。

(文責 川崎敦子)



令和6年度 モリウミアスオンラインプログラム 活動実績

2024.5.13
第1回
カツオ編



2024.6.10
第2回
島豆腐みそ
銀鮭編



2024.7.8
第3回
タコ編



2024.8.19
第4回
アワビ
つぶ貝編



2024.9.9
第5回
あなご編



2024.10.21
第6回
マグロ編



2024.11.11
第7回
ホタテ編



とりにくいなあ

2024.12.9
第8回
アイナメ
さけ編



ちいさく切るぞ！

2025.1.20
第9回
ホワイト
アスパラ編



焼くぞー！！

2025.2.10
第10回
味噌作り編



まぜまぜ

2025.3.10
第10回
ハレの日編



うまく切れるかな…



オンライン風景





現地プログラム

日時: 2024年10月12日(土)~14日(日) 2泊3日

場所: 宮城県石巻市雄勝町桑浜60「モリウミアス」

内容: 雄勝の豊かな自然と海と里で、自然とともに生きる暮らしを体験する。

参加者: 子ども2人、スタッフ2人



DAY1

印象に残ったこと/今日あったこと、知ったこと

おかしひびくりかいた
のしかった。

チャレンジしたこと

まうちゅうつくにこ
ど。

学んだこと/気づいたこと

たのしかったこと。
つめはへんなこと。

DAY2

印象に残ったこと/今日あったこと、知ったこと

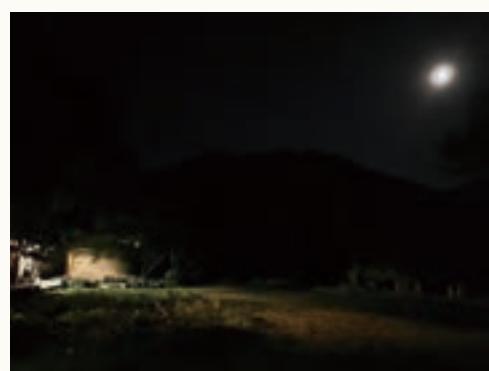
つり、そじ、はつきり、うみ見
うつたしの7つの特徴。

チャレンジしたこと

つり

学んだこと/気づいたこと

ない。



東北の森と海と里で過ごした3日間

園山 美恵

東北新幹線に乗って仙台駅でバスに乗り換え、1時間後に到着したところは、前面に海、後面には山に囲まれた元学校の施設だった。放し飼いの鶴の出迎えで到着したところは、まだ夕方には早い時間だったが、山々に影が迫り、うす暗くなっている。

「ここで3日間過ごせるのか」と弱音を漏らしてしまう。隣にいる子どもも、いつもの勢いはなく、恐る恐る辺りを見回している。日頃は、YouTubeを見るのが大好き、お菓子が大好きという女子たちが、自然の只中に放り込まれた戸惑いは手に取るように伝わってくる。

けれども、その不安は開会式が終わるころにはすっかり消えていた。なぜなら、引率者である私たちの方に一度も寄ってこないでのある。3日間の滞在中、引率者と子どもたちは完全分離されている。体験プログラムによっては同じ活動に参加することもあるが、引率者は現地スタッフの手伝いで参加し、引率した子どもに直接関わることはほぼない。

例えば、子どもたちは、食事作りやお風呂焚きなど自分たちの生活ための活動をしていると、あっという間に仲良くなっていく姿が見られた。それは知らない土地で、それも自然のど真ん中にいるからこそ、助け合っていくなかで深まる絆ではないだろうか。

そしてこれは、引率者である私たち支援者も同様だった。保育から離れて子どもたちの活動の様子を見るという貴重な機会を得た。そして、現地スタッフの方や他団体の支援者と一緒に、自分たちの食事の準備をする。夕食時には現地スタッフの方から、子どもたちの報告がある。それからは、子どもたちのことはもちろん、モリウミアスのことやそれぞれの団体の活動のことなど、心ゆくまで話すことができた。

最初は危惧された3日間が、あっという間に過ぎたことは言うまでもない。駅まで迎えに来てくれた職員に、帰りの新幹線で手紙を書いていた子がいた。その手紙には「いつも笑顔をありがとう」と書かれていた。普段の活動では想像できないことだった。海と山に囲まれた里で過ごした3日間は参加した子どもたちや私たちに、日常生活での当たり前が当たり前ではなく、たくさんの人々の働きによってできていることを気づかせてくれたと思う。

モリウミアスでの体験で

谷口 慶花

モリウミアスについてから出るまでの2泊3日の間、支援員と子どもが関わるのは日中の数時間だけだった。別の宿泊施設に泊まり、支援員の宿泊場には基本的に子どもは立ち入り禁止の状態で、朝と夜に頼れるのは現地のスタッフという形が基本であった。

全てが自然でできており、食事は自分たちで作ったものや昼間の活動でとってきたもの、自分たちで盛り付けをして感謝をして食べる。昼間の活動も森、海、山、畑などで作業をしたり、自然のものを使って工作したりと様々な内容だった。

近年デジタル化が進みゲーム機などが盛んになるとともに、安全面から遊具の取り壊しなどで子どもが外に出て遊ぶことが少なくなった。そんなデジタルから離れて自然と過ごすということは、子どもたちだけでなく大人にも必要なことだと強く感じた。自然の美しさ、命の尊さ、資源の循環などこの3日間で子どもたちの成長とともに感じられた。

自分でできないことは周りの友達を頼り一緒に取り組む、それでも難しい場合は身近な大人を頼り学びへつながる。また、大人が全てを先回りしてサポートするのではなく見守るということも必要であることがわかった。

この経験からの学びは自身の今後の生活においての糧になるのではないかと感じる。

03 令和6年度 滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業





滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業について

滋賀県「ヤングケアラー支援体制強化事業」の支援団体として、令和4年度より特定非営利活動法人芹川の河童で事業をお受けしています。

当団体は活動を通して、継続的な相談・支援ができる体制を整え、ヤングケアラー自身による自発的な相談を促すとともに、ヤングケアラーの周囲と地域による早期発見と支援につながることを目指します。

滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業をお受けして、今年度で3年目になる。当初だれも知らないヤングケアラーという言葉は、この三年で誰もが一度は聞いたことのある言葉になった。

当法人も、何もわからないという状況から始めて三年間何とか事業として形になってきたように思える。それは、地道に繋がってきた子どもたちの成長がみられることや繋がる子供たちが増えたことなど感じられるからである。初めての取り組みとして、カード作成ワークショップを開催。高校生が作ってくれたことで、昨年のカード配布後の問い合わせ数を今年度ははるかに上回るほど反響は驚くほど大きかった。相談に繋がるかというとなかなか難しいが、高校生が連絡してみたくなるという当初の狙いは達成できたと思っている。

その上子ども第三の居場所への受け入れはかなり増えてきたので、断る検討しなければならないことが心苦しく思うことがある。今後、居場所のネットワークを作る必要性を感じている。

これからも、当事者に寄り添える支援を目指していきたい。

(文責 川崎敦子)



ケアラー支援の新たな一步をともに探求していきたい

立命館大学 斎藤 真緒

芹川の河童とのお付き合いはすでに3年になりますが、今年度もピアソーター養成講座で関わらせていただきました。また、私が発起人としてかかわっているYCARP（子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト）が定期的に主催している専門職養成講座（2024年12月7・8日）にも、4名参加していただきました。

芹川の河童がこれまで築いてきた地域のネットワークをフル活用して、いろんな団体・個人を巻き込んだ取り組みが、滋賀の北部で広がっています。とりわけ、芹川の河童ならではの楽しいイベントの工夫は、多くのヤングケアラーにとって、参加のしやすさにつながっています。

ケアラーにとってピアサポート活動への参加は、何よりもまず、ケア中心の生活から少し離れることでのリフレッシュとなります。他のケアラーとの出会いの中で、自分自身のケア経験を振り返ったり、これまで「当たり前」「仕方ない」と思っていたことも、別の捉え方ができる可能性が広がります。しかし、ケアそのものがなくなるわけではありません。ケアをめぐる「葛藤」は、ケアが続く限り、ケアラーがむきあっていかなければならぬものです。ケアから距離を置く、という選択を可能にする社会資源を開発するだけではなく、ケアを続けるという選択をしても、家庭の中だけで閉塞的なケアを続けるのではなく、風通しのよいケアしていく必要があります。

昨年、JST-RISTEX事業として、「ケアの葛藤に寄り添い、ケアラーの社会的孤立・孤独を支える包括的支援プログラム」が採択されました（代表：斎藤真緒）。芹川の河童にも共同実施者として参画していただくことになっています。来年度はさっそく、芹川の河童と一緒に、家族で参加できるプログラムを開発することを予定しています。ヤングケアラーだけではなく、そのきょうだいやケアを受けている家族も参加できるプログラムは、ケアゆえに、家族のイベント力が低下している家族にとっては、貴重な時間の共有であり、家族全体のエンパワメントにつながりうると考えています。地域の人的資源や自然資源をうまく活用したプログラムの開発・拡充を通じて、ケアラー支援の新たな一步を、芹川の河童さんとともに今後も探求していきたいと考えています。

子ども第三の居場所「みんなの食堂」の受け入れ

辻 恵美子

子ども第三の居場所は、3年目を迎えた。

毎月曜・水曜・土曜の週3日。未就園児から中学生の10名程の子どもたちが利用している。少しづつ利用人数も増え、この場所が、子どもたちの居場所として周知認知されてきていることが伺われる。

学校帰り、放課後デイから、自宅から居場所にやってくると、それぞれ自分の好きなことややりたい遊びを見つけて、一人時間を楽しんだり、スタッフと一緒に活動活動したりする。5時になると「夕食タイム」。たわいもない会話をしたり、日頃のことを笑いながら話したりすることで、みんなで楽しく食卓を囲む。

水曜日は「テレビゲームの日」。土曜日は、体験プログラム。学生が考えた活動や工作や料理等、様々な体験ができる。子どもたちにとっては貴重な経験になっている。公園や地域の行事に参加することで、彦根を感じることもできる。

子どもたちが、「ここにきて楽しい」と思えるよう、家庭でもなく学校でもなく、まさに第三の居場所となるよう継続していきたい。



令和6年度 ヤングケアラー支援実績

令和6年度 ヤングケアラーお弁当配達

◆子ども第三の居場所への受け入れ

幼児2名、小学生7名、高校生以上3名
合計12名

◆子ども第三の居場所食事提供日数

118日

◆お弁当配布

9日 14食

イベント・行事

◆インクルーシブ食堂

2024年4月27日(土)
場所:日野町 松尾公園
参加者:大学生1名、職員3名

◆ヤングケアラーデイキャンプ

(多賀町大滝の子どもの居場所合同)

2024年8月17日(土)
場所:高取山ふれあい公園
参加者:当事者2名、大学生3名、職員6名

◆ヤングケアラー小学生合宿 ふゆキャン

2025年1月4日(土)~1月5日(日)
場所:鳥羽や旅館
参加者:当事者3名、大学生7名、
職員9名、ボランティア1名

令和6年度 視察・見学受け入れ

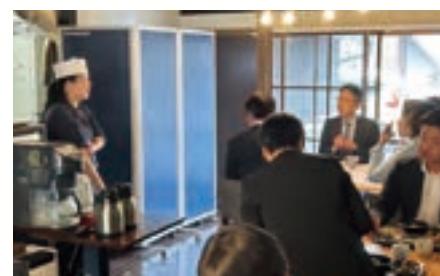
高島市様、甲賀市様、湖南市様／彦根市市議会様／高島市子ども第三の居場所ここくる様／NPO法人つどい様
ソウル・ベッカー様／こども家庭庁様 他、視察・見学受け入れを行いました。



高島市様



彦根市市議会様



彦根市市議会様



高島市子ども第三の居場所ここくる様



ソウル・ベッカー様



こども家庭庁様



大かっぱまつり

一期一会の出会い

開催日時 **2025.3/22 土**
13:00-16:00

会場 **彦根商工会議所4階**

主催:NPO法人芹川の河童／後援:滋賀県、彦根市

タイムスケジュール

- 13:00～ オープニング・みんなの縁日スタート
- 13:10～ 令和6年度法人報告 子ども・若者の声
- 13:40～ 休憩
- 14:00～ 「みんラジ」公開録音
- 15:00～ 休憩
- 15:15～ THE BOOGIE WOOGIE 特別ライブ
- 15:45～ エンディング



協力:日世株式会社びわ湖工場



「みんラジ」公開録音

ヤングケアラー支援の一環として行っているラジオの公開収録!
 ロックバンド「THE BOOGIE WOOGIE (ザ ブギー ウギー)」をゲストに迎え、子どもたちに伝えたいことを語っていただきました。



THE BOOGIE WOOGIE 特別ライブ

「その日集まった人間のその日の音を、その日の君の声を」をテーマに活動する「THE BOOGIE WOOGIE」の特別ライブを開催しました。

イベント開催にあたりご協力いただきました皆様にお礼申し上げます。

今後も定期的な開催ができるよう努めてまいります。引き続き、あたたかいご支援を賜れますと幸いです。





みんながつながるラジオ

子ども第三の居場所 学生リーダー
角田涼太・山口壯太

ヤングケアラーとオンラインでつながるための新たな取り組みとして、YouTubeラジオを始めた。タイトルは『ヤングケアラーもそうでない人もみんなで語り合いたいラジオ』、略して『みんラジ』。内容はヤングケアラーについてや、芹川の河童の取り組みの紹介、雑談などである。回によっては、ゲストを招いて話してもらうこともある。ヤングケアラーにも、そうでない人にも聞いてもらうことで、ヤングケアラーについて考えるきっかけになったり、芹川の河童に興味をもってもらったりすることを目的としている。

パーソナリティーの2人にはヤングケアラーの当事者経験がないため、押し付けにならないようにすることと、気軽に聞ける雰囲気づくりを心がけている。芹川の河童ではおもしろそうなことをやっているなど、少しでも興味をもってもらえたなら嬉しい。タイトルのとおり、ヤングケアラーにもそうでない人にも聞いてもらいたい。

実際に活動する中で感じたこととして、このラジオを始めてから、ラジオに出るゲストの方だけでなく、法人内や、外部の方も含め、ラジオの感想を伝えて下さるので、このラジオをきっかけに、様々な交流が生まれていると感じた。よって、この取り組みはオンラインサロンという役割だけではなく、情報発信や、つながりを生み出す機会の創出にも役立っていると考える。

今後は、ヤングケアラー当事者の方ともつながっていきたいが、どのように発信していくばつながれるのか分かっていないため、方法は今後も模索していきたい。その第1歩として、まずはこのラジオで色々なゲストとつながっていき、そのつながりの中で、当事者の方とつながることができればと思う。そして、ゆくゆくは当事者の方にラジオに出ていただき、ラジオを通して、当事者の声や想いを、聞いている方に直接届けられるような場になっていけばと思う。



びわモニ～滋賀NEWSショー～ | 2024年11月27日配信



第1回 大かっぱまつり | 2025年3月22日公開収録



YouTubeチャンネル 登録お願いします！

みんなの食堂・子ども第三の居場所 検索





デイキャンプを主催して感じたこと

子ども第三の居場所スタッフ 山口 壮太



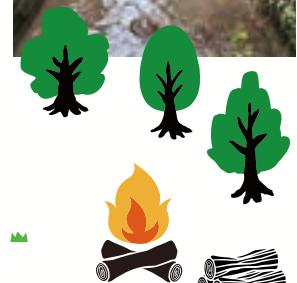
デイキャンプは、私が所属するNPO法人おおたき里づくりネットワークが主催する子どもの居場所イベント「おおたき・ものづくりラボ」と、NPO法人芹川の河童が運営する「子ども第三の居場所」が合同で行ったイベントである。会場は多賀町にある高取山ふれあい公園。

当日は、参加者全員がアイスブレイクを通して交流したり、ピザ作り（調理体験）があったり、川遊びをする時間があったりと盛り沢山の内容であった。

ピザ作りの際、窯の準備に時間がかかってしまったことで、調理や食事の時間が遅れてしまったことが印象に残っている。調理も時間の関係で全員が経験したわけではなかったので、不公平さが出てしまったのは反省点だと感じた。

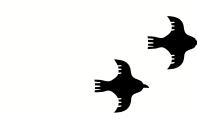
ただ、全体的には大きなトラブルもなく、みんなが自然で遊ぶ体験を楽しめていたのではないかと思う。今回は空調の効く部屋を休憩室として借りていたのでそこも正解だったと思う。

多賀と彦根の子どもたち、スタッフが交流できる貴重な機会なので、今回の反省点を踏まえつつ、体調・安全管理を徹底しながら今後も実施していきたい。



ひこキャンに参加して感じたこと

小林 萌々果



私は、今回ひこキャンに参加させて貰い、子どもたちのコミュニケーション能力は素晴らしいなと感じた。

私自身、ひこキャンに参加する前は子どもたちとコミュニケーションを上手く取ることが出来るのか、1泊2日の生活を安全に楽しく過ごすことが出来るのかとても責任や不安を感じていた。実際に、子どもたちと関わっていくうちに、私から話しかけるのではなく子どもたちから話しかけてくれていて、子どもたちのコミュニケーション能力は本当に素晴らしいなと感じた。

しかし初めは、子どもたちと少し壁を感じたが、自己紹介や彦根ウォークラリーをしていくにつれ、子どもたちとの距離は縮まり、子どもたちが「私のお姉ちゃんは…」「俺はこれが好き…」など自ら自分の話をしてくれ、私も緊張が解け、楽しく過ごすことが出来た。

2日目のヤンマーミュージアムも何事もなく楽しく過ごすことが出来た。また機会があれば参加したいなと思った。





アートフェスタ勝負市

園山 美恵

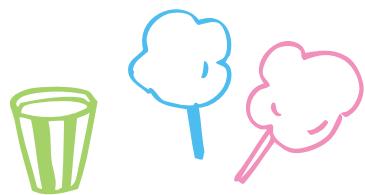
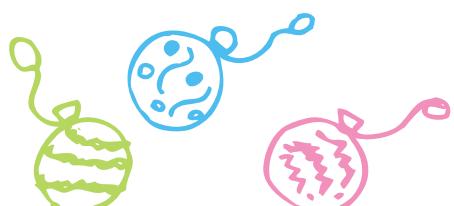
6月8日（土）と9日（日）の2日間にわたり、滋賀県彦根市の伝統的建造物群保存地区内にある花しょうぶ通りにて「アートフェスタ勝負市2024」が開催されました。今年のテーマは「超越—exceed」です。2000年から続くアートフェスタ勝負市が、異なるパワーアップを目指して掲げられました。長年、参加をしている当法人も、このテーマに負けない内容を企画し、出店しました。

8日（土）は、「ゲームカフェ」と「ポップコーン屋」です。「ゲームカフェ」の、室内ではスマブラ対決が繰り広げられ、外では各種ゲームを楽しんでもらいました。「ポップコーン屋」は、若者スタッフが当法人の活動を利用する子どもたちと一緒に、ポップコーンを作って売りました。子どもたちはお客様とのやりとりがとても上手でした。

9日（日）は、前日の2店に加え「みんなの縁日」と称して、「みんなのだがしや」「スーパーボールすくい」「スライムつくり」「アイスクリームや」を出しました。そこに「きゅうりのあさづけや」を急遽開店すると、あまりの人気に浅漬けが間に合わなくなるくらいでした。

この2日間は、スタッフは出店しつつもアートフェスタ勝負市を楽しみました。

アートフェスタ勝負市は、花しょうぶ商店街と地域団体、そして彦根市内にある滋賀大学、滋賀県立大学、聖泉大学の学生がタッグを組んで作り上げてこられました。当法人も花しょうぶ商店街で活動する一員として、これからも盛り上げていきたいです。





オレンジリボンについて

榎 千奈津

10月26日、滋賀県のびわ湖こどもの国でオレンジリボンフェスタがありました。オレンジリボンとは子どもを虐待から守るメッセージリボンです。

そこには遊具や、各団体の出し物がたくさんありました。第三の居場所に来ている子どもたちも、大きなすべり台やロープウェーなどの遊具で楽しい時間を過ごしていました。さらに吹奏楽やゆるキャラのステージイベントや、大小さまざまたくさんのシャボン玉に手を伸ばす、子どもたちの姿が見られました。

他にも各団体で子どもたちが楽しく遊べるようなゲームを出していました。

そのなかで芹川の河童はミニ四駆とボードゲームを出しました。ミニ四駆は保護者の方も知っていて子どもたちが走らせているのを見て「懐かしい」という声がありました。

ボードゲームは初めて遊ぶ方もいて「こういうゲームがあるのを知れてよかったです」という声をいただきました。子どもたちの笑顔あふれる場になったことを嬉しく思います。



日野子ども食堂フェスタに参加して

子ども第三の居場所 学生リーダー 角田 涼太

芹川の河童では、県内の学校や行政機関、そのほかの関係機関との連携を深め、ヤングケアラーに寄り添うための支援活動や講演会、研修会を開催している。その一環として、2024年4月27日に「日野子ども食堂フェスタ」に参加した。様々な団体がお祭りの屋台のように出店し、多くの子どもや親子連れが訪れ賑わっていた。

芹川の河童は、ヤングケアラー啓発とボードゲームのブースを出店した。訪れた親子連れに、ヤングケアラーについて知っているかというアンケートをとり、よく知らない方にはヤングケアラーについて説明した。こちらの説明をしっかりと聞いてくれる方が多く、ヤングケアラーについて知ってもらうよい機会になったと思う。

ボードゲームブースには、子ども食堂フェスタの最初から最後まで、地元の子どもたちが入れ替わり立ち替わり来てくれた。このブースで遊んで他のブースへ行き、また帰ってくるという形で、子ども食堂フェスタ内の子どもの居場所の一つになっていたようだ。

学生スタッフが来てくれた子どもたちと仲良くなつたため、我々が帰る際には子どもたちが風船や飴をくれたうえに、見送りにも来てくれた。こういったイベントに参加して現地の子どもたちとのつながりを作つておくことが、いつか何かの支援につながるかもしれないと考えた。



「校内居場所カフェ」という新しい居場所

芹川の河童 相談役 吉田 武史

「校内居場所カフェ」と聞いて、すぐにそれがどのような場所で、どんな所なのか、すぐにイメージできる人が世の中にどれぐらいいるのだろうか？今、この冊子を手に取り読まれている方々（比較的世間一般の方よりは関心を持っておられる方々）はどうだろうか？そう言う自分も最初は全くイメージできていなかった。学校の中にカフェを作る。関東地方の進んだ学校では図書館の中を作っているらしい。「？」図書館の中は飲食禁止と昔から教わってきた。また自分自身の教員時代にもそう指導をしてきた。今までの自分の常識、既存の知識では推し量ることのできない世界がそこには存在した。

だが待てよ。教員時代にずっとこう言われてきた。「教師の常識、世間の非常識」「学校が一番遅れている」「教師が、学校が変わらないといけない」だからこの仕事を引き受けようと思った。そして自分が見落としてきた、見えなかった、いや見ようとしてこなかった生徒達に教師としてではなく人としての常識、つまりは素直・誠実・真面目な気持ちで向き合おうと決心した。

「校内居場所カフェ」は学校（主に高等学校）にお願いをして放課後などに生徒達に様々な食料を無料で配布するボランティア活動である。そしてピアソーターにも参加してもらい、できる限りその場で一緒に飲食し、ゲームなどもしながら打ち解けた空間作りをしてゆく。時には音楽ライブなども開催した。そうやって居場所を提供し、生徒達との距離を徐々に縮めてゆき、ケアラーとして（自分で自分がケアラーであることが分かっていない子もいる）苦しんでいる生徒に寄り添ってあげることを目的とする。

別に新しいことではない。保健室登校の生徒、教室に入れない生徒、入れても片隅で一人でいる生徒、交わる時間やきっかけを作れない生徒…以前からそういう生徒は存在した。自分達がケアしてこなっただけだ。そして今、そういう生徒達はどんどん増えている。ヤングケアラーとして。私は第二の教員人生のつもりでこの「校内居場所カフェ」に取り組んでいる。

校内居場所カフェ実績

滋賀県立愛知川高等学校

…70人参加

7月4日、9月24日、11月15日、1月17日

滋賀県立彦根工業高校

……20人参加

1月7日、3月24日





「食糧支援＆校内居場所カフェ」の取り組みを通じて

滋賀県立彦根工業高校 定時制 浅居 英雄

昨年末に本校定時制生徒のために、NPO法人「芹川の河童」より支援の申し出を頂きました。その後1月7日始業式終了後に、校内の1室で「食糧支援＆校内居場所カフェ」を実施しました。当日はボランティアスタッフの方々が10名お越し頂き、少しでも生徒の家計負担の軽減になればと多くの食料をお持ち頂きました。またその場で軽食をとる準備もして頂きました。

実施前は定時制で初めての試みでもあり、一体何人程度の生徒が来てくれるのか心配や不安もありましたが、約15名の生徒が来てくれました。ボランティアスタッフの方と食料の受け渡し時の会話のやり取りや、その場に残って軽食をとりながら友達や教員、大学生のボランティアと会話を楽しむ生徒の姿が見られました。食材の受け渡し時、普段の学校生活ではあまり教員との会話が少ない生徒が、「有り難うございます。」とお礼を伝える姿や軽食をとりながら柔らかい表情で談笑する等、リラックスした雰囲気の中で「心地良い時間」を過ごすことができたように思います。

昨今はスマートフォンの普及に伴い、一人で過ごす時間が増える中高生が多いため、学校以外の大人と接する機会が少ないので現状です。今回の取り組みを通じて、生徒が「社会に自分たちを支援してくれる暖かい大人が居ることへの気付き」に繋がればと願っています。大変お忙しいなか、本校生徒のためにこのような機会を設けて頂き感謝しています。

校内居場所カフェを実施して

滋賀県立愛知高等学校 人権厚生部長 片岡 幸一

本校では令和5年度後半から滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業としてNPO法人芹川の河童による校内居場所カフェ実施に協力している。令和6年度は7月4日、9月24日、11月15日、令和7年1月17日と計4回活動を実施した。

校内居場所カフェと実施をすると、毎回50～70名程度の生徒たちが足をはこんでいる。生徒たちは芹川の河童のスタッフが用意したゲームなどのさまざまなプログラムに参加しながら、スタッフのみなさんとさまざまな話をしている様子である。スタッフには大学生など年齢の比較的若い方もおり話しやすいこともあり、何度も一緒にゲームをしたり、楽しそうに話をしたり、思い思いに楽しんでいる様子である。その中には学校では見せない顔を見せている生徒もいるであろう。開かれた学校の活動として、少しでもヤングケアラー支援につながればと感じている。



校内居場所カフェ

川村 登志子

ヤングケアラー支援事業の1つとしての、校内カフェに参加した。私は看護師として看護の仕事に携わってきたが、福祉の知識に乏しく、恥ずかしながら「ヤングケアラー」のワードも初めて耳にしたほどだ。それと同時に、ケアが必要なケースが増加している現状にも、やはり驚いた。

子育ての手も離れ、看護の対象がほぼほぼ高齢者だった日々のそんな私が、高校生相手に対応出来るのかと思うのは、当然の流れだが、校内カフェを経験した感想は「可愛い」だった。

美味しいから豚汁おかわりしてもいいですか?と聞いてくる子、ヤングケアラーの話を聞いて、「あっそれ僕やわ」とポップに答える子、もちろん話しづらそうな子もいるが、カフェの前に来てくれる、話を聞いてくれる、貴重な時間だと理解した。

また、ヤングケアラーのワードを知っていると答えた子も多く、前にカフェの時間いたからと、取り組みの成果も見て取れた。当たり前の日常に校内カフェが布石となり、近くに支援者が居ることを理解して貰えるよう、今後も事業に参加したいと思っている。

学生と話すなかで気づいたこと

子ども第三の居場所スタッフ 山口 壮太

校内居場所カフェは芹川の河童がヤングケアラー支援の一環として、県内の高校にお邪魔して、食堂宛てに寄付された食料品や生活用品を学生たちに配布したり、その場でボードゲームや飲食もできるような居場所を提供している取り組みである。現時点では、愛知高校と彦根工業高校の2校で行っており、私はどちらとも参加させて頂いている。

活動するなかで、来てくれた高校生に話してみると、家事を手伝っている子や、家のためにアルバイトをしている子、兄弟が多い子など、色々な事情を抱えている子がいることが分かり、直接目には見えないが、実際に話してみることで、分かってくることが多いあると思った。

ただ、むやみにヤングケアラーという言葉を使って、「周りにヤングケアラーはいませんか?悩んでいませんか?」と呼びかけていくのは、当事者にとっては大きなお世話だと思う人もいるかもしれないと思った。高校生だと学業、アルバイト、部活、進路など色々なことで悩む繊細な時期だと思うので、ヤングケアラーという言葉をどのように用いてこの活動を行っていくのか、ということは今後皆で検討していきたい内容だと考える。



校内居場所カフェに参加して

山根 恵津子

校内居場所カフェって？初めて聞く言葉だった。打ち合わせの会議に参加させていただきそれがヤングケアラー支援事業で学校の教室をお借りしてカフェのようなスペースを設けて生徒たちに気軽に立ち寄ってもらい交流できる場所を提供する事だと知った。

そして愛知高校と彦根工業高校での校内居場所カフェに参加し、校内のお借りした教室で温かいお味噌汁や飲み物やお菓子を無料で提供し、おにぎりやパンやカップ麺を選んで持ち帰ってもらうスペースを提供し、机や椅子をまん中に置いて食べながらおしゃべりしたりボードゲームやカードゲームを用意し「このカードゲーム懐かしい」と男子高校生が遊んだり大学生とおしゃべりする姿が見られました。愛知川高校では急遽歌手の方が来てくださり生演奏でゲリラライブが始まり楽しい時間を過ごした。

「おいしい」とお味噌汁を食べながら「今日お昼ご飯をたべていない」と話す子や、この持ち帰った食料がその子たちの一食分のなる事を知った。大学生とおしゃべりしている高校生でこのような支援事業に興味があるという子もいたり、何気ない会話の中から繋がりが広がったり、高校生たちの悩みや抱える課題を知る事ができるんだなあと実感した。

そして各高校へ生徒一人一人に配布してもらうよう「愛に困っていないか？家族のことで困ったら連絡してね」というフレーズと相談先を記載したカードを持って行くお手伝いをさせてもらいながら、悩みを抱えている子がここに連絡し少しでも心が軽くなり、そして解決へと繋がるといいなあと思った。今後早期の予防支援として中学校での提供や定期的な開催、提供する食料等の支援をして下さるお店探しが課題であると聞いた。これからもこの校内居場所カフェで多くの子どもたちと出会っていきたいと思っている。





ヤンケアカードイベントとは？

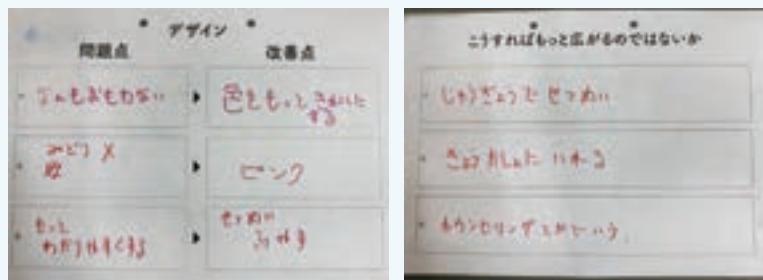
芹川の河童相談役 吉田 武史

「ヤンケアカードイベント」とはどのようなことをするのか？まずその説明が必要だろう。当法人では県の方からヤングケアラー支援事業の委託を受けており、昨年度より滋賀県の近江八幡以北の全ての高等学校にQRコードを付したLINE相談の案内カードを配布させてもらっている。全ての生徒に一人一枚手に届くように、直接高校訪問をして手渡しで配布しているので非常に積極的で前向きな活動であることは間違いない。

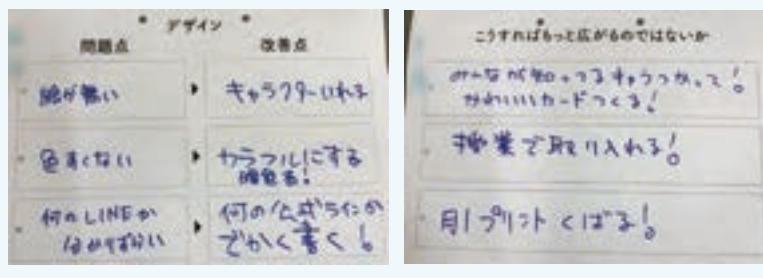
ただ、その反応は少ない。そこで冷静にもう一度スタッフで相談をした。正直に言ってHRで先生からこのカードが配られて一体どれぐらいの生徒が興味、関心を示してくれているのだろう？手に取って、手元に残していくのだろう？どんなカードなら興味を示してくれるのだろう？そうだ、生徒達に聞けばいいんだ！何なら生徒達にデザインしてもらえば一番良いのではないか？そうやって始まったのがこの「ヤンケアカードイベント」である。

みんなの食堂で集まって行ったのが1回、実際に高校まで出張して行ったのが2回。そしてこのイベントのもう一つの特徴はプロのクリエイターの方にファシリテーターとして参加してもらい、高校生が普段中々接することのないクリエイターという職業人に直接接してもらうというキャリアガイダンス的な要素も含んでいることである。

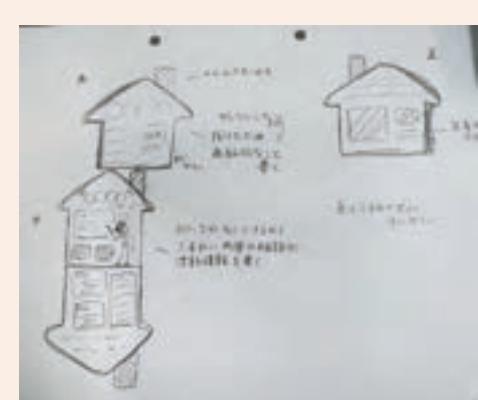
我々の狙いは的中した。高校生達の自由な意見が次から次に飛び出してきた。「ポイントがつくようにすれば」「（前年度の）縁っぽいのは良くない。何か交通安全のカードみたい」「ショッキングピンクなんかどう？」「四角じゃなくて星型は？」「4コマ漫画ふうにしては？」「キャラクターデザインすれば？」… 書き切れないほどである。またファシリテイトして頂いたクリエイターという新しい職業にも大きな興味を示してくれた。そうやって出来たのが今年のカード。傑作、だと自負している。



ヤンケアカードイベントのワークショップで高校生たちから出た意見の一部



高校生が考えるカードのデザイン案





高校生と作る支援のデザイン

合同会社ゴチャトレーディング
代表 立澤 竜也

「ヤンケアカードイベント」では、高校生とともにヤングケアラー相談窓口のカードを制作した。もともとのカードデザインに対して、率直な意見を交わしながらグループで話し合い、アイデアを出し合ったうえで、それぞれが個別にデザインを考えた。その結果、参加した高校生等が想像以上に本気で取り組み、驚くほど多くの素直で新鮮なアイデアが生まれた。

大人目線やプロのデザイナー視点では気づかない発想が飛び出し、「相談しやすいカードとは何か」を高校生自身が真剣に考えてくれたことが印象的だった。色使いやキャッチコピー、QRコードの配置など、それぞれのアイデアを組み合わせ、一枚のカードが完成した。

このイベントを通じて、カードデザイン制作そのものが、ヤングケアラーの存在を知るきっかけになることも改めて実感した。また、高校生のアイデアをプロのデザイナーが形にすることで、より伝わりやすいデザインになることの重要性も感じることができた。

今後多くの高校生とイベントを通じて、ヤングケアラーの存在を広めながら、デザインの力を活かした支援の形を作っていくたい。



▲イベントを経て完成したカード

高校生自身が作るカード

学生リーダー 角田 涼太

従来のヤンケアカードは大人が作ったものであるが、今回の取り組みでは高校生から直接聞いた意見をもとにカードを作成した。イベントに参加してくれた高校生からは、配られる側の視点を活かしたおもしろい意見が多く出た。ピンク色で目立たせる、ハートにトゲトゲをつけるなど、どういったものであれば興味をもって手にとってもらえるかを熱心に考えてくれた。

カード作りを通してヤングケアラーの境遇について想いを馳せることで、参加してくれた高校生にとってもヤングケアラーについて考えてもう良い機会になったと感じた。

「こどもまんなか支援」という言葉があるが、カード作成にも子どもの生の意見を取り入れることが大切だと考えた。子どもが子どものために作ったカードは、より手にとってもらいやすいのではないだろうか。



ヤンケアカードイベントに参加して

学生リーダー 小原 和真

以前から学校などで配布していた「ヤンケアカード」のデザインがリニューアルされた。「ヤンケアカード」とは、ヤングケアラーオンライン相談室の公式ラインを告知するカードである。

リニューアルにあたっては、みんなの食堂に集まりアイデアを出し合った。また、「ヤンケアカードイベント」として愛知高校にも行き、高校生にも意見を募った。高校生たちもデザイン案作りを楽しみながら、積極的に意見を出してくれた。そこでは、学校で配布されるプリントや他のカードに埋没してあまり内容を確認せずに捨ててしまうという重要な意見も聞けた。

交通安全系などに多く、「またか」と感じるという緑色基調のデザインから、水色の地にピンクと緑の河童を配置したものに変更した。北川さんのおかげで、ポップで可愛いデザインに仕上がった。さまざまな意見を取り入れて良いものができたと思う。今すぐ必要でなくても手元に残してもらい、いざという時に思い出して使ってもらえる。そんなふうになればと思っている。



令和6年度 研修・講演記録

開催日	研修名
7月6日	安心・安全な語りのための講習会
8月3日	ヤングケアラーピアサポーター養成講座
8月7日	令和6年度 滋賀県子ども若者ケアラー支援関係機関職員研修
8月23日	市区町村こども家庭支援指導者研修
9月21日	ヤングケアラーピアサポーター養成講座
10月26日	ヤングケアラーピアサポーター養成講座
12月6日	イギリスに学ぶ子ども・若者ケアラー支援
12月7日	2024年度当事者とともに考える子ども・若者ケアラーのための専門職養成講座
12月8日	2024年度当事者とともに考える子ども・若者ケアラーのための専門職養成講座
1月20日	2024年度 キャプネス援助職交流研修会
1月20日	生きづらさを抱える世帯の子どものための居場所 フリースペース推進事業 研修会
2月21日	滋賀県社会福祉学会 第43回大会
2月22日	健康しが活動創出支援事業「生きづらさを抱える若者を世の光にプロジェクト」報告会
2月3日	生きづらさを抱える世帯の子どものための居場所 フリースペース推進事業 研修会
3月2日	2024アットスクール・アットスクール高等学校成果発表会
3月8日	若者サミット文化祭

ピアサポーター養成講座

ヤングケアラーピアサポーター養成講座を、基礎講座2回、応用編1回の形態で開催。今年度は3年目ということもあり、応用編では事例に基づいたワークショップという新たな内容にも取り組んだ。参加者は、社協職員や行政、民生委員など様々である。ヤングケアラーの認知が進んできたことから、どの分野でもヤングケアラー支援をしている方々がいて、関心度は高かった。事例をもとにグループワークをすることで支援の考え方ややり方を考えるヒントをもらえたと言われていた。

当法人でも、支援の中で支援者がこうあるべきから抜け出せず、支援の仕方に悩んでいた事例もあったが、ワークショップで様々な方々の意見を聞くことで、原点に戻り支援をしていく必要があることを改めて認知できる機会になった。

(文責 川崎敦子)



日程

8月3日（土） 基礎編

講師 立石卓也（立命館大学人間科学研究所補助研究員）……13名参加

9月21日（土）

講師 斎藤真緒（立命館大学産業社会学部 教授）……10名参加

10月26日（土）

講師 立石卓也（立命館大学人間科学研究所補助研究員）……8名参加





対話を大切に、1人1人の声を大切に

武石 卓也

これまで、芹川の河童さんとは、YCARP(子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト)のメンバーとして秋のキャンプや夜の居場所づくりなどでご縁があった。そして、今回、初めてヤングケアラー支援の講座を担当させていただいた。私の講座は概念的な話が中心であり、受講者のなかには、「実践にすぐに活かせない」というもどかしさを感じられた方もおられたのではないかと感じている。

私自身がそうであったように、「何かしてあげたい、何かしなきゃいけない。」という気持ちを持っている支援者は少なくない。しかし、支援者の思いが先行していくと、次第に当事者が置き去りにされ、いつしか上から目線の支援になっていき、そこには支援者の自己満足しか残らないかもしれない。だからこそ、支援者は焦らず、対話を大切にして、目の前の子ども・若者と向き合い、1つ1つのニーズを拾っていく姿勢が、子ども・若者の安心できる場所を作っていくことにつながっていく。

芹川の河童さんには、子どもの多様な声を受け止める複数のチャンネルがあり、素敵なスタッフさん、ピアソーターの学生さんがいる。これからも、多様な子ども・若者の思いをキャッチし、様々な生き方を支えるための楽しい活動を続けていってほしいと思っている。



子どもに寄り添う支援を

彦根市子育て支援課 課長補佐 北川 一

本市では、第2期彦根市・子ども若者プランにおいて「子ども・若者の元気・学び・育ち そして夢をみんなで応援するまち ひこね」を目指し、様々な施策を実施してきた。一方で、ヤングケアラーの問題は近年新たな社会課題として認識されるようになり、当該プランには記載されていなかった。

支援の枠組みが確立されていない中、ケアラーである子どもやその家庭が抱える課題を把握し、解決に向けた支援のあり方を模索しながら、実際に関わりを持ってきた。その過程で、公的なサービスだけでは課題の解決が難しいことを改めて認識したところである。

そのような中、特定非営利活動法人芹川の河童がヤングケアラーの居場所や校内カフェの運営、ピアサポートを実施していることは大変心強い。特に、心情に寄り添う支援や、家庭を離れて過ごせる時間・場所の提供は、ケアラーにとって大きな支えとなっている。

今後も、民間と行政がそれぞれの強みを活かし、支援の充実を図れるよう連携を深めていきたい。特定非営利活動法人芹川の河童のさらなる発展を期待する。



一人で問題を抱えることのない環境を作つくっていきたい

滋賀県子どもの育ち学び支援課

令和6年6月に、「子ども・若者育成支援推進法」の改正により、ヤングケアラーが法律上の支援の対象として位置づけられたが、本人が気づかない、家庭内のプライベートなこと等の理由から、本人発信でSOSを出したり、自ら相談したりすることは、少なく、周りの大人が気付けるようにしておくことが重要である。

当事者からは、「ただ話を聞いて受け止めてくれたことが心の支えになつた」という声をよく伺う。信頼のできる人に「話を聞いてもらう、受け止めてもらう、見守られる」そういう環境が子ども若者にとって支援への身近な入り口だと感じている。

誰もが「ちょっと相談できる信頼する人や居場所」があり、そこから必要なサポートにつながることで、一人で問題を抱えることのない環境を作つくっていきたい。

今後も、芹川の河童さんをはじめ、地域・学校等、様々な方々と協働しながら、当事者に寄り添ってヤングケアラー支援の充実に取り組んでまいりたい。





Just trust yourself, then you will know how to live.

「誰にも会いたくない」カフェ

その気持ち、分かち合いませんか？

理由ははっきりしなくとも、毎日の生活に生きづらさを感じていませんか？
「誰にも会いたくないカフェ」はそんな悩みを抱えた若者たちの集まりです。

お茶を飲みながらおしゃべりをしたり、
ゲームをしたり、ただぼーっと過ごしてみたり・・・
一人で過ごすのもOK、みんなで過ごすのもOKな場所です。

仲間と出会うなかで、一緒にこれからのことを考えてみませんか？

令和6年度 誰にも会いたくないカフェ 活動実績

2025年年明け、県外に出ていた若者が彦根へ帰ってきたからとサロンに顔を出してくれた。昨年も就職で大阪へ帰った若者が彦根に来たついでにとサロンに寄ってくれた。若者にとってサロンはどういう存在か、どういう存在であるべきなのかスタッフとして試行錯誤の毎日だが、彦根に帰ってきたからと寄ってくれた若者の笑顔を見ると、これまでのサロンの進み方は間違いではなかったと思わせてくれた出来事であった。

今年度は昨年度に比べ、参加人数だけで延べ200人以上増えた。常時参加する人数も14人となった。趣味の話をする人、麻雀、絵を描く人、勉強する人など様々な過ごし方で毎週火曜日・木曜日の12時から17時までのうち、自分の好きな時間帯をサロンで過ごしている。それぞれが好きなことをして他の人の存在を気にしているし、意識している。一人でいるけど、決して一人ではない、そんなサロンを居心地がいいと思って通ってくれる若者との時間を大切にし、これからもサロンの扉を大きく開けて、若者たちと出会えることを楽しみにしている。（米田 紀代子）

●毎週火曜・木曜日 12時から17時開所

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
開所日数	8	9	10	9	9	8	10	8	8	8
参加者数	58	65	77	62	62	60	82	65	59	48
見学者数	10	6	13	7	7	6	18	11	12	15

合計	
開所人数	79日 + 花しょうぶ市、鳥居本赤祭りにゲームカフェで参加
参加者数	640人（参考：2023年4月～1月 471人）
見学者数	96人（参考：2023年4月～1月 77人）

有形文化財遠信舎と花しょうぶ通りに存在するサロンの利点

主任

サロンに初めて来た若者がよく「何が入っているのですか？」と尋ねてくる。それは玄関ドアを開けて足を踏み入れたサロンの奥に鎮座する黒い金庫のこと。重厚な黒い扉が中に何が入っているのかを想像さすには十分な存在感を醸しだしている。

それ以外にも若者たちの気を引くのが建物の造り。昭和初期に郵便局として使われていた名残があちこちにあり、懐かしい温かみを感じる空間が若者たちにとっての居心地の良さになっている気がする。それと同じくらいに花しょうぶ通りのお店の方々との関わりが若者たちに大きな影響を及ぼしていると思っている。

花しょうぶ通りを歩いて、また自転車で通所してくる若者たちにいつも元気に声をかけてくださる。また、ランチをサロンで食べる若者にとって、隣のお肉屋さんの揚げ物があるかどうかは大きな問題。「今日はコロッケあったよ」「串カツ売り切れやで」それが会話になる。夏の終わりにはもう食べられませんと若者が言うくらいかき氷の差し入れがあった。

本当に長く続く温かみのある空間と花しょうぶの温かい人たちとのふれあいで社会との接触が少なかった若者が少しずつ変化していくのが嬉しい。サロンを丸ごと受け入れ見守り育ててくださる花しょうぶ通りの皆様がいてこそそのサロンだと痛感している。

目まぐるしい一年

誰にも会いたくないカフェ スタッフ 田中 紀行

今年度は、今までの様々な媒体を使った宣伝や口コミなどの効果が功を奏し、サロンを訪れる来訪者(登録者)が増え、それと比例するようにバイト等に精を出す若者も増えた。花しょうぶ市や鳥居本祭りなどの町興しにも積極的に参加し、それぞれが役割を担い、通年以上にイベント活動の活気が溢れていたように思える。

一方、季節の変わり目や冬は体調面と精神面で不安定になり、自分自身もしくはかかりつけ機関の相談員やサロンスタッフに相談しながら来訪を決めることも少なくない。もちろんこちら側から強制することではなく、最終決定は本人たちに委ねている。また、サロン参加者の中には精神的支柱になる存在の若者もあり、そこにいてくれるだけで和やかな雰囲気にしてくれているのも居場所作りに一役買っているようだ。

週二回と多くない日数ながらも、自分なりのポジションを確立できるほどサロンでリラックスできていることに、スタッフ側からの視点で視ても安心感を感じるひとときを垣間見る機会が増えたことを嬉しく思う。

利用者からスタッフに

誰にも会いたくないカフェ スタッフ 細江 美希

2024年9月から、月に1日ほどスタッフとして参加することになった。それまで1年半くらい利用者として過ごしている場所でスタッフという立場が増えることに、とまどいと自分に努まるのかという不安があった。「今までと同じように過ごしていい」という言葉に甘えさせてもらいながら、自分なりに利用者さんとの会話を増やすよう心がけた。

個人的に印象深いできごとは、利用者の方が企画した鍋パーティーとピザパーティーだ。利用者の方が買い出しと準備を行い、和気あいあいと楽しい時間が過ごせた。会話もいつもより弾み、利用者さん同士の仲も更に深まったように感じた。

スタッフとして自分はまだまだ力不足だが、これからも皆さんに来たいと思える雰囲気作りに貢献出来るよう頑張っていきたい。

不可視化されやすい人々とつながる回路

滋賀県立大学 准教授 原 未来

2023年4月にこども家庭庁が発足し、こども基本法が施行されてから間もなく2年が経過する。「こどもまんなか」をキャッチフレーズに、子どもや若者の声を聴くことが日々的に掲げられてきたが、その広がりの外で取り残される人々の存在を、いま危惧している。

もともと日本の若者支援体制は、本人や家族がニーズ(SOS)を発出することによってはじめて開始されるという「要求応答型」として広がってきた。そこでは、明確に課題(困り感)を自覚し、外部に相談するという発想をもち、その行動が可能な資源や環境が整った人たちが支援につながり可視化される。「なんかよくわからないけどつらい」とか、「人に言っても解決できない」と思えば、支援につながらるのはもちろんのこと、その人の存在も、思いも、状況も、社会からは見えないまま、ときに放置され打ち捨てられていく。社会がつながり声を聴けているのは誰なのか、私たちは問わなければならないし、「誰」と「どんなふうに」つながることができるのかということは、その意味できわめて重要な実践課題である。

では、芹川の河童でおこなっている取り組みは「誰」とつながることができているのか、改めて考えてみてもいいかもしれない。みんなの食堂は「食べる」ことを目的に来られる場であり、そこから新たな人とつながったり、他の取り組みへと参加を広げていったりできる可能性をもっている。校内居場所カフェは、生徒たちが過ごす日常に団体側が「お邪魔」して、関係をつくっていく取り組みだ。「相談」ではない入り口を整備すること、来るのを待つのではなくこちらからかれらの生活圏に入していくことなどを通じて、「要求応答型」ではかかわらない「誰か」と出会える回路をつくっていることは団体の強みだろう。そして「相談」とか「支援」という切り口ではなくつながった人たちと関係を形成していくことで、社会に可視化されやすい人々とはまた違う「声」を聴き取ることができるかもしれない。



利用する、若者たちの声

一歩を踏み出せた

Nさん

遠信サロンに通う前、長い間通うところのない生活をしていた。どこかに定期的に通うことが難しかった中、遠信サロンに行き始めた。

サロンではボードゲームをすることもあったが、それが苦手な私はひとりで絵を描くことが多かった。ひとりで過ごしていく中、スタッフや他の参加者が話しかけてくれたり、ひとりでいたい時はひとりにしてくれたりと、適度に関わりながら「決まった場所に通う」ことの練習をさせてもらった。

また、スタッフとの関わりで、誰かに困り事を相談することも練習できたように思う。毎回通う度にきちんと会話をしてもらい、信頼関係を構築してもらった上で適切に困り事や普段のことを話せたように思う。年上に頼ることも、サロンに通うことで身についた技術だと言える。

遠信サロンで、通うこと、相談をすることの練習ができたおかげで、三ヶ月前から作業所への通所を開始することが出来た。サロンに通った過去が自信になり、不安なく新しい挑戦に踏み出せたように思う。

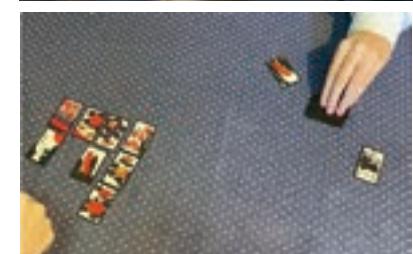
遠信サロンに関わって

Mさん

遠信サロンに来る前は外に出ることが辛かったが、今は定期的に外に出るようになった。

きっかけは、遠信サロンのボードゲームをみんなで楽しくできたことである。初めのうちは、「カタン」や「街コロ」をやっていて、最近はよく雀をやっている。さらに、そこから川崎さんに任せていただき、「みんなの雀荘」のプロジェクトに関わることが出来た。

サロンに来てから様々な経験をさせていただいて、人と関わる練習もできた。



働き出した、若者の声

アルバイトを始めて思ったこと

子ども第三の居場所 アルバイト 中邑 勇治

私は現在子ども第三の居場所と安土のロボット教室と学童でアルバイトをしている。

アルバイトを始めたころは子ども第三の居場所だけだったが安土の学童の先生との縁などもあり、ロボット教室と学童にも通うようになった。最初は日数も少なく何をしていいのかも分からなかったが、仕事を教えてもらって気が付いたことはすぐやるようになると周りも評価をしてくれて自信がついた。

また、ロボット教室に通うようになってから普段全く乗らなかった電車にも乗るようになり、プライベートでも電車で映画を見に行ったりするようになったのだ。そして現在私が働いているアルバイトは全て午後からなのだが、それが私には合っていて続いている理由の一つなのではないかと思う。

アルバイトを始めて良かったと思うのは、外出する機会が増えたことと給料がもらえること、そして社会とつながっていると思える事である。

働き始めて

遠信サロン 細江 美希

2024年5月に子ども第三の居場所で働き始めた、そこから7月には「みんなのだがしや」のアルバイトスタッフ、9月に遠信サロンのスタッフとしても働いている。

長年引きこもりの無職だったので、最初はとても緊張して不安しかなかったが、第三の居場所には会ったことのある先生やスタッフさんが多く、みんな優しい人ばかりなので安心することができた。働き始めても、すぐ嫌になって辞めてしまうのでは無いかと不安を持っていたが、夏の酷暑で体調が万全ではない時も休まずに働けたことが仕事を続けられる自信に繋がったように思う。

第三の居場所で子どもたちと接するのは自分には向いていないと思うことも多く反省ばかりだが、社会と繋がっているという喜びと周りのスタッフの皆さんのサポートのおかげで今も働き続けられている。

サロン開設8年を迎えて

彦根市子ども・若者課

平成29年度から委託・実施していただいている遠信サロンも、今年で8年目となりました。この場に来ている若者たちの変化は目に見てすぐに分かるものではありませんが、誰かと出会い、交流することで、若者たちの「何かをしたい」気持ちが育まれ、次につながっていく様子を知ることが出来て、一担当としてとてもうれしく思います。

遠信サロンは、「なにをしても、しなくてもいい」場所です。特に過ごし方についてのプログラムはなく、何かを強制するようなこともありません。

絶対に誰かと交流をしないといけない場所でもないですが、そんな場所でも他の人の考え方や行動に触発されて変化していくのですから、誰かとかかわり、していくというのは、生きて成長していくうえで必要不可欠なことなのだと改めて考えさせられました。

サロンで得た様々な経験やパワーを基に、若者たちがこれからも変化し続けていくことを願っています。

担当課としての声

令和6年度 相談実績

当法人では、外部の相談員として(株)アットスクール代表取締役 鈴木正樹氏に1人1時間として依頼している。今年度で5年になる。相談者は、当法人に就労する若者や「誰にも会いたくないカフェ」を利用している若者が中心であるが、相談事業を受けている保護者の方や地域の方も受けようになってきている。

相談内容は、勤務内容や体調、生活習慣、家庭の事情等の様々なことを話し、しっかり聴いてもらい、適切なアドバイスをもらうことで少しずつ気持ちが落ち着いてくる。毎月相談の回を重ねることで少しずつ効果が見られる。また、相談を続けそれを実践することで就労につながるケースも見られる。

若者たちの成長が見られるこの相談事業、これからも継続していきたい。 (辻 恵美子)

4/23(火)	5/21(火)	6/20(木)	7/11(木)	8/22(木)	9/19(木)	10/17(木)	11/14(木)
4人	4人	5人	7人	4人	4人	5人	5人
12/12(木)	1/16(木)	2/20(木)					
5人	4人	3人	(R 7.2 現在)				

若者の就労を支える為の相談支援

株式会社アットスクール
代表取締役 鈴木 正樹

NPO法人芹川の河童は、学童保育を基幹事業としながら、不登校やひきこもりなど毎日の生活に生きづらさを感じている若者たちの居場所として「誰にも会いたくないカフェ」(通信サロン)やナイトケアサロンとして「誰にも会いたくない夜」や循環型未来食堂「みんなの食堂」など多角的に事業を行っています。



「誰にも会いたくないカフェ」では。悩みを抱えた若者同士が気軽に集まり、お茶を飲みながら話したり、ゲームをしたり、ただぼーっと過ごしてみたりなど、自宅から出てカフェに来ることで、同じ悩みを持った若者と出会い、趣味を通じて気軽にコミュニケーションが取れる場となり、同法人の基幹事業である学童保育事業では、若者に就労の機会を創ることで、社会参加や職業適性を考える場となっています。

若者たちの悩みや不安の理由や背景は多様であり、中学や高校で不登校を経験したり、卒業後、就職したものの職場の人間関係や業務内容にうまく適応できずに離職を繰り返し、自信を失いつつなど精神疾患に至るなどの若者も多くいます。

私が担当させていただいている相談支援は月に1回、個別に時間を設定し、一人ひとりの悩みごとや困りごとを伺い、解決に向けた助言を行っています。

相談の中で私が心掛けていることは彼らが「1年後どうなっていいか?」ということを聞き、「なりたい自分に近づくためはどうしていくか?」と一緒に考えていくようにしています。本人と話をしながら、まずは「朝、自分で起きることから始めてみよう」や「近くのコンビニに買い物に行くことから始めてみよう」など、一人ひとりの状況に合わせて、目標を設定して、それを達成することで自己肯定感を向上するよう努めています。

冒頭で述べたように、芹川の河童さんは若者の居場所から、彼らが活躍できる就労の場までの事業を包括的に行われていることで、若者たちが安心して挑戦できる場が実現できていると思います。

昨年度、1名の相談員で始めたこの事業は、今年度は、新たに1名の相談員が誕生し2名体制になった。また、相談補助員1名も加わった。多業務との兼務の相談員であるので、それほど多くの相談を受けることができないが、これまでに比べると多くの相談を受けることができた。

相談の年齢や障害区分などは規制を設けずお受けしているが、当法人の多業務の内容である若者支援、ヤングケアラー支援に結びつくような相談は多いように思える。そのため、ハローワークや精神科の病院など他分野との連携も大事にしているつもりである。ただ、その中でも家族まるごと支援の必要性を感じることが多々あり、計画相談の限界と、私たちの力不足を痛感することも多々ある。

相談者の望む生活を主軸に計画を立てさせていただいているが、法律の理解などまだまだ勉強が必要であると考えている。今後は積極的に研修に参加し、当事者にとってよりよい計画相談が出来るように精進していきたい。

(文責 川崎敦子)

相談件数 児童（幼児も含む）……20名

成人12名

初任者研修を終えて

山本 美穂

今年度、初任者研修を終え、11月から相談支援員として活動させていただいている。障害分野のサービス調整を行うことが主な仕事だが、机上では片付かない細かな調整が多く毎日が勉強である。

研修でも「利用者様に寄り添った支援を」ということを教えていただいた。一言に寄り添った支援と言っても対応はとても難しい。人は生まれ育った環境や出会った人の影響を受け、それぞれ価値観を持っている。それに加え、置かれている状況も違い、ひとつとして同じ支援はない。お話を伺い、支援させていただいているが、これで本当によいのか、他によい案はないのか、川崎代表ともディスカッションを重ねながら、一つひとつ対応させていただいている。

「心の声を言葉に」研修で最も心に残っている言葉だ。利用者様の言葉に込められた想いも読み解きながら、より良い生活となるよう、今後も丁寧に関わっていきたい。

07 もっとみんなの食堂



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

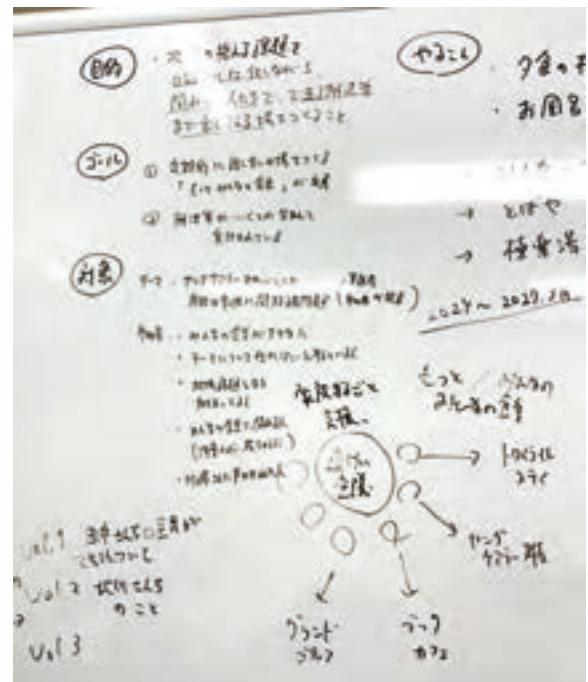
これまで若者支援、子どもの支援、ヤングケアラー支援をしてきたが、このような支援は当事者である若者・子どもの支援をしていても、それが問題解決に直結するわけではない。問題は当事者だけが引き起こしているのではなく、様々な家族の問題が絡み合っているからである。ヤングケアラー支援として子どもの居場所で、楽しい時間や食事の提供をしているが、それだけでは問題解決にならないことが分かってきた。家族の問題も併せて支援できること『家族まるごと支援』が必要であることが分かってきた。家族まるごと支援をするためにはうちだけではなく関係機関・他業種・多職種・地域・学校など様々な機関が連携しないと支援することができない。

そこで、今年度は家族まるごと支援のための連携会議を開催してきた。地域の困りごとを連携しながら楽しく解決することを目指し「もっとみんなの食堂」とな名づけ開催。意味は「もっとみんなの食堂使ってください」と地域に向けて呼び掛けている。

地域の問題をカジュアルに話し合おうと、9月に発足して定期的に隔月開催してきた。全4回。参加者は、行政、県社協、市社協、大学生、教授、障害者団体など30人。そこから、4つのプロジェクトが発足した。

この取り組みは、重層的支援の参加支援にあたり、今後の活動の発展が期待される。

(文責 川崎敦子)



「巻き込まれ力」を発揮できる場所

株式会社いろあわせ
代表 北川 雄士

「まちづくり」や「地域課題解決」をうまく進めるためには「巻き込み力」を運営主体側がどれだけ持っているかが大切な第一歩である。多くの人を巻き込んで、様々な声を拾う中で、小さいが大切な声を見つけて、丁寧に育て、形にする。そのときに「目的(なんのために)」と「ゴール(どこまでいけば一旦のOKとするか)」の設定をキッチリしていると、関係者の目線が揃い、成果といえるものが形になる。

芹川の河童で「もっとみんなの食堂」が立ち上った。私も微力ながらコーディネーターとして関わらせてもらう中で一番感じているのは、運営主体の「巻き込み力」はもちろんのこと、地域の方がわざわざ巻き込まれに来ていることだ。主婦や学校教師、公務員や経営者、政治家等、本当に様々な立場の人々が「なんか呼ばれたから」「楽しそうかなーと思って」と参加して意見を出し行動に移す。想いがある人ばかりがぶつかって、うまくいかないことも散見される中、実はこのゆるい「巻き込まれ力」こそが、地域の課題解決には大切で、誰もが持つ力ではないか、と思う。

芹川の河童は、この「巻き込まれ力」を発揮させるのがメチャメチャうまい。かくいう私も、突然巻き込まれた1人である。いつのまにか「呼ばれ」ており、参加しているうちに主体側になってきた。「なんでやってるんやろうー」と思いながら、責任が大きくないからこそ、気軽に本質的な議論ができる。気づいたら巻き込まれる人が増えていき、地域の課題がどんどん解決されていく。巻き込まれ力を持っているあなた「もっとみんなの食堂」の扉を気軽に叩いて、どんどん巻き込まれてください。



みんなの保健室をはじめて

川村 としこ

「みんなの保健室」の名の通り、老若男女を対象に、日々の体調不良であったり、日常の不安や不満が吐露できる。必要であれば適した受診科を伝え、帰る時には、少し気分が楽だと感じてもらえば、という場所である。もちろん専門知識をもつ機関へ繋げて行くという目的を持っている。

月に1回の開催であり、まだ馴染みのない保健室の為、縁側を開け道行く方にお声掛けをさせていただいている。有難いことに、この場は「みんなの食堂」として認知があり、こちらを怪しい人としてではなく、挨拶を返して下さる。笑顔で「揚げ物揚がってる?」と聞かれた時は笑ったが、それも楽しいコミュニケーションだ。また、小学生の子供達は、中を覗き「ただいま」と声をかけてくれる。

この地域にとってこの場所が、いかに受け入れられているかが実感できる。そんな暖かい場所で、ここにこ縁側で声をかけている看護師を想像して欲しい。少しづつ賑やかに溶け込んでいくはずだ。



「成績の上がらない塾」に通わせるか?

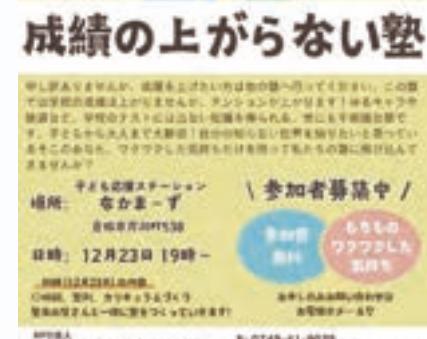
芹川の河童相談役 吉田 武史

「成績の上がらない塾」は地域の課題に対し地域の様々な階層の人々で取り組んでゆこうという「もっとみんなの食堂プロジェクト」の一環でスタートしたものである。

なぜ皆塾に通うか? 通わせるか? 成績を上げるためにある。では何故成績を上げようと思うのか? それが幸せで心豊かな生活に繋がると思うからである。確かに学校での通知表や内申書に表れる数字は大切でそれを向上させることは必要である。でも、我々大人は知っている。それだけでは本当に幸せで心豊かな人生を送ることはできないことを。

知っているなら教えてあげようじゃないか。それが大人の役目である。なのに世の塾は通知表や内申書の数字を上げるための塾ばかり。それ以外のことを教える塾があってもいいのではないか? いや、絶対必要だ。

この塾は成績は上がりません。でも、テンションは必ず上がります!



みんなの雀荘・みんなのゲームセンターに参加

もっとみんなの食堂、ワクワク

中沢 けい子

2月の会議に参加。そこは、みんなの食堂。年齢や職業など様々な方が、グループに分かれ、楽しそうに話されている。私の参加したグループは、ゲームや麻雀を楽しめる企画を話されている。最近は、スマホゲームなのでも麻雀も人気とのこと。昔のテレビゲームなどレトロなゲームの話も楽しそう。

色々な人が来て、一緒に麻雀を楽しめる日を作ろう！名前は「みんなのゲームセンター・みんなの雀荘」。早速、地域で健康マージャンを開催されている所に、色々なことを教えてもらいに行くことになった。麻雀を知っている若者と、全くの初心者の若者、丁寧に教えていただき、楽しそうに麻雀をしている姿、これはみんなの食堂でも楽しくできそうだと思った。

「みんなの食堂」が更に色々な形で、交流や居場所になるなんて素敵なことであります。それを様々な方々が主体的に関わって開催していく「もっとみんなの食堂」ワクワクが止まらない。ぜひ、皆さんもご参加を♪



“子ども”に戻れる時と場

「たまりら」 野瀬 純一

私は「たまりら」という、生きづらさを抱えた若者の居場所活動を月2回行なっており、その中でレトロゲームをしていることを第0回の「みんなの食堂」で話したことから、「みんなのゲーセン」の話につながった。2025年2月末現在で2回行い、芹川の河童の学生スタッフには初めて見るものもあるが、30歳代以上の方には懐かしさを感じるものがある。それぞれの思いを感じながら、同じ場で同じゲームをしていると、参加者みんなが夢中でゲームを楽しんでいた“子ども”に戻っているのを感じた。

私も含め、普段の立場や役割も忘れ無我夢中にゲームに興じることで、楽しい時間を共有する。“子ども”時代にこの経験を十分に得られず大人になった人にこそ、ぜひこれから「みんなのゲーセン」に来てもらい、一緒に“子ども”に戻りたいものである。



キャラクターブルクリに参加

キャラクターブルクリプロジェクト

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 遠城 孝幸

年齢も性別も立場も様々な人が集まり、ヤングケアラー支援という社会問題解決のための取り組みとして、ゼロから皆が意見を出し合う機会があった。その場で各々が自分と異なる視点からの発想に「そうそう」とか「その手があったか」といった刺激を相互に受けながらユニークなアイデアが次々に生まれ、それらに優先順位を付けて、やってみよう決まったことのひとつがこのプロジェクトである。

ヤングケアラーについても含まれるが、一般に認知されているとは言い難い社会課題解決のための取り組みについての周知はなかなかに難しい。とはいっても解決に向かうためには、多くの人の理解と協力を得ることが必要であることは言うまでもない。

このプロジェクトでは、まず主要キャラとなる河童のキャラクターを作成し、そのキャラクターを中心に様々なコンテンツ（マンガ、動画、着ぐるみなど）で発信していく向きで動き始めている。それらにはここみんなの食堂に出入りする子どもや若者はもちろん大人も含め、架空の人間や妖怪として（投影させて）登場させていくことも予定している。こうしたコンテンツに触れた人が、そのストーリーに共感したり、登場キャラに愛着を持つことによって、その結果、理解が広まり賛同者が増えるのではないかと考えている。

個人的にもこのプロジェクトによって生まれたキャラクターが、今後何を語り、どのような動きを見せてくれるのか楽しみにしている。このような取り組みに面白みを感じ、一緒にキャラクターを育てていきたいと思う人がいればぜひ仲間になっていただきたい。

芹川の河童に期待すること

彦根市福祉保健部社会福祉課 自立支援係長 小川 祐輝

彦根市では、生きづらさや社会生活上の困難を抱えるすべての人々に必要な支援が届けられる体制の整備を目指し、令和5年度から「重層的支援体制整備事業」に取り組んでいるところであり、芹川の河童にもその一端を担っていただいている。

しかし、芹川の河童の活動はそれだけにとどまらない。「食」を切り口とした地域の居場所づくり、県南部エリアを対象としたヤングケアラー支援などその活動は幅広い。加えて、現在は「もっとみんなの食堂」と題して更なるプロジェクトを模索されているところであり、市内にこうした団体があることを本当にありがたく思う。

僭越ながら私から芹川の河童に期待したいことは、更に多くの人に支援を届けるための仕組みづくりである。ヤングケアラー支援以外の事業については、拠点型であるために、比較的遠い地域に住む人たちが利用しやすい面がある。従来の拠点を大切にしながら、いかに活動域を広げるか。芹川の河童は、次のステージに入っているように思われる。

人の広がり、重なりを

彦根市子育て支援課 課長補佐 北川 一

地域の課題は多様であり、一つの機関や団体だけで解決できるものではない。だからこそ、異なる立場の人々が集まり、それぞれの知見や経験を持ち寄ることが重要である。

特定非営利活動法人芹川の河童が中心となり実施している「もっとみんなの食堂」は、地域住民、ボランティア、そして課題を抱える当事者が一堂に会し、地域の課題を共に考える場である。この場では、多様な主体が新たな地域課題の設定や、解決に向けた具体的な取り組みが話し合われている。参加者が互いに影響を受けながらアイデアを育み、既にいくつかのユニークな取り組みが実施されていることは、地域共生社会の実現に向けて大きな意義がある。

こうした場では、参加者の視点が重なり合い、新たな支援の形が生まれる。関わる人が増え、多様な視点が加わることで、よりよい活動へつながる。この「人の広がり、重なり」が、地域の支え合いの力を強めていくのだと実感している。



つながりつづける

当法人は、若者の居場所「誰にも会いたくないカフェ」、地域のコミュニティカフェ「地域循環型未来食堂みんなの食堂」、子どもの居場所「子ども第三の居場所みんなの食堂」、ヤングケアラー支援などを運営している団体です。福祉制度の狭間で支援の届き難い分野を対象としています。居場所のことを厚生労働省の講演会で「制度が確立していないのでなんでも引き受けられる場所」と表現されていたことがあります、当法人は地域の困りごとをなんでも引き受けられる場所を運営しています。この居場所は地域の花しょうぶ通り商店街の協力を得て設置していることから、湯浅誠さんは「地域の人がわがことのように心配しているこのような居場所を見たことがない」と言ってくださいました。商店街と深いかかわりを持ちながら地域の方々と共に運営することが、当法人の特徴であると言えます。

コミュニティカフェの地域循環型未来食堂みんなの食堂は、食で繋がる居場所です。『食』を提供できるということは、人間の生きていく上で必要な生命維持を繋ぐことになります。みんなの食堂では、引きこもりの若者が三年間生活していましたし近所には社会的養護の若者が住んでいます。どんな状況でも「食」を支えられることは生活を支えられることになることを、これまでの取り組みから実感しています。加えて、ヤングケアラーの支援をするようになると、「食」を必要としている子どもたちに出会うことが増えてきました。子どもたちの中には食事の提供を必要としている子もいますが、多くは食卓を囲むという楽しい時間としての経験を必要としている子たちです。食卓を囲む子どもたちは、「楽しいね、楽しいね」「こんなに楽しい食事ははじめてやね」と笑いながら食事をしています。このような場を求めているのは子どもだけでないと思います。近所の高齢の方々は、「ご飯作れない」「スーパーの総菜はあきた」と話しながら食堂のお弁当を買ってくださいます。顔の見える人が作ったものを提供するということ、共に食卓を囲める関係を作ることは、生命維持に必要なもののひとつであるコミュニケーションを担っているのだといえます。

福祉制度の支援が入りにくい狭間の困りごとは、困っている一人の問題を支援すれば解決するのではなく、家族全体の問題が影響しあっていることが多く見られます。子ども第三の居場所では、安心できる場所の保障・寄り添う大人の存在・お腹を満たす食事の提供はできますが、根本的な問題解決になっているとは言えません。必要なのは『家族まるごと支援』です。『家族まるごと支援』をするためには当法人だけではなく各関係機関、教育機関、地域など福祉の枠を超えた連携をしないと支援することができません。みんなの食堂では、地域連携会議『もっとみんなの食堂』が始まりました。地域の困りごとをコミュニティカフェから考える取り組みこそが、みんなの食堂の次の役割であると思っています。

地域の力を信じて、誰もが幸せを感じる街づくりをコミュニティカフェから。

NPO法人芹川の河童
代表 川崎敦子

■ 事業活動広報誌 かっぱ通信 7月号

■ 事業活動広報誌 かっぱ通信 12月号

■ ヤングケアラーピアサポーター講座



■ カッパトーク (旧ヤングケアラーオンライン) 告知カード



■ 京都新聞 2024年11月23日発行

地元 楽町 2024年(令和6年)11月23日 土曜日

話し相手 学習支援 ゲームで楽しく さまざまな場づくり

**彦根のNPOや市民、学生ら
「もっとみんなの食堂」会議発足**

彦根市民の有志らが、子どもや家庭が抱える問題の解決に地域で取り組む活動グループ「もっとみんなの食堂」会議を立ち上げた。地元のNPOや市民、学生らが、地域の運営や、ヤングケアラーの支援などをしている同市のNPO法人「丹波川の河童」が呼びかけ、地域住民のほか、市や社会福祉協議会、大学教員、学生ら約20人が参加している。

13日夜には、同市河原町の「みんなの食堂」で会議を開催。参加者らが意見を出し合い、活動をねらするキャラクター「河童」をつくり、話し相手がいる場所づくりを実現するため、具体的な活動スケジュールを決めた。代表の川崎敦子さんは「今後もまちの困り事を提案してもらい、プロジェクトとして取り組んでいきたい」としている。

（今川敢士）

子や家庭の困り事 地域が解決

家庭や学校以外の子どもたちの第三の居場所となる「みんなの食堂」の運営や、ヤングケアラーの支援などをしている同市のNPO法人「丹波川の河童」が呼びかけ、地域住民のほか、市や社会福祉協議会、大学教員、学生ら約20人が参加している。

13日夜には、同市河原町の「みんなの食堂」で会議を開催。参加者らが意見を出し合い、活動をねらするキャラクター「河童」をつくり、話し相手がいる場所づくりを実現するため、具体的な活動スケジュールを決めた。代表の川崎敦子さんは「今後もまちの困り事を提案してもらい、プロジェクトとして取り組んでいきたい」としている。

■ 中日新聞 2024年12月24日発行

県庁 月曜

2024年(令和6年)12月24日(火曜日)

ヤングケアラーに理解を



彦根 声優志望の2人ラジオ番組配信

家族の介護や世話をする子ども「ヤングケアラー」への理解を広げようと、県立大4年の角田涼太さん(22)と、多賀町地域おこし協力隊の山口紹太さん(24)が、ヤングケアラーについて語るラジオ番組を動画配信サイト「ユーチューブ」を使って配信している。声優志望という共通点がある2人。「若い人にも聞いてもらえたう」と自らの声で情報を届ける。

(鈴木美帆)

番組名は「ヤングケアラー」もそうでない人もみんなで語り合いたいラジオ」。角田さんが「スミスくん」、山口さんが「グッキー」として登場し、回ごとのテーマに沿って自由に話す。番

ヤングケアラーってなに?



「困っていること言えない人の助けに」

第2回のラジオでは、ヤングケアラーの定義や介護者との違いなどを、芹川の河童の川崎敦子代表をゲストに迎えて配信した。「ヤングケアラー」の定義は変わってきた。他の日常生活上の世話を過度に行っていると認められた者とされま

す「大学生になったからといって、ケアから離れる人ではない。長い目で見た支援ができるといいでね」と語り合った。根底にあるのは、地域の人々にヤングケアラーについて知つてもらい、支援の輪を増やしていきたいという思い。社会問題を扱うラジ

組は8月に始まり、これまでに8回配信した。彦根市内で地域循環型の食堂「みんなの食堂」や、若者サロンの運営を担うNPO法人「芹川の河童」が企画。2人は普段から芹川の河童の一員として子どもとの居場所づくりなどに携わり、ヤングケアラーとされる子どもたちとも交流がある。

河童の川崎敦子代表をゲストに迎えて配信した。「ヤングケアラー」の定義は変わってきた。他の日常生活上の世話を過度に行っていると認められた者とされま

す「大学生になったからといって、ケアから離れる人ではない。長い目で見た支援ができるといいでね」と語り合った。根底にあるのは、地域の人々にヤングケアラーについて知つてもらい、支援の輪を増やしていきたいという思い。社会問題を扱うラジ

組は「春田気が重くなりがちで若い人にも聴いてもらいつらい」とし、趣味の話なども取り入れた楽しい番組作りを意識。話す内容などは、事前に2人で打ち合

わせをして録音に挑む。共に声優の仕事に興味があるという2人。それぞれ養成所や専門学校に通っていて、「ラジオが学んだ」と実践する場にもなっている。

角田さんは「困っていることを言えない人たちの助けになれば。ラジオを通じてつなぎを増やしていくたい」、山口さんは「大学の講義や活動を通してヤングケアラーを知り、何か開かれたらと思った。当事者もそうでない人にも聞いてもらいたい」と意気込んでいる。

ラジオは、毎月第2、第4月曜に配信を予定している。芹川の河童のユーチューブチャンネルから、過去の配信分も含めて聴ける。QRコード。



QRコード

■ 広報ひこね 2025年1月1日発行

ひきこもりへの正しい理解を

全国的に増加傾向にあるといわれる「ひきこもり」。「わがまま」や「甘え」といった誤解を受けがちですが、当事者こそ大きな苦しみを抱えています。

「ひきこもり」に向き合う当事者や家族の力になるべく、彦根市ではNPO法人や医療機関などの関係機関と連携した支援を展開しています。

PICK UP!

2025. 1. 1

広報ひこね

少しだけ、勇気を出した。
少しだけ、ほっとした。

できない時の気持ちに、寄り添いたい。

「ずっと家にいることは辛い。でも失敗が怖くて行動できない。そんな人に必要なことは“何もしないことが認められる場所”です。」そう語るのは市からの委託を受け、通信サロン「誰にも会いたくないカフェ」を運営する川崎さんです。

花しょうぶ通りにある旧郵便局舎を活用したこのサロンには、10代から30代の生きづらさを抱える若者が集まります。直接的な自立の支援ではなく、心を支えることがケアに繋がるのだといいます。「誰かと話したければ話せばいいし、ひとりでいたければ、それでもいい。人の声やまちの音が聞こえるこの場所では、地域の一員であることを感じてもらえるはずです。」



NPO法人井川の洞窟
代表 川崎 さや子さん

これまで支援の手が及ばなかった人に、届いてほしい。

「通常の診療だけではひきこもり状態の人に医療は届かないが、行政と連携することで支援の幅は広がりました。」南彦根クリニックの院長を務める上ノ山さんは

外来受診を行う傍ら、家族や行政などからの情報提供を受け、医療行為が必要な可能性がある人の家を訪れます。

勇気を出して誰かに相談した結果、支援に繋がり状況が改善した人を、多く診てこられたそうです。「助けを求めるとは、その人の強さに繋がる。もうダメだと決めつけをしないでほしい。」

一方、解決を焦り過ぎることは禁物であるとも言う上ノ山さん。当事者も、家族も、支援者も「焦らず、でも決して諦めない」ことが大事なのかもしれません。



南彦根クリニック
院長 上ノ山 一貴さん

お問い合わせ

ひきこもりについて、どこに相談して良いかわからない時は、こちらにお問い合わせください。

社会福祉課

☎ 23-9590
■ 26-1768

彦根市社会福祉協議会

☎ 22-2821

悩みや困りごと、生きづらさを感じている子どもや若者(未満39歳まで)へのサポートを行います。

子ども・若者 総合相談窓口

☎ 26-6880

通信サロン「誰にも会いたくないカフェ」

☎ 20-9366
※・木 12:00 ~ 16:00

令和6年度

特定非営利活動法人 芹川の河童

日本財団・子ども第三の居場所

滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業ヤングケアラー支援事業

WAM助成 家族まるごと支援実現のため地域連携の中心となる居場所事業

活動実績報告書

令和7年4月発行

特定非営利活動法人 芹川の河童

〒522-0083 滋賀県彦根市河原2丁目3番4号

TEL 0749-20-1322

私たち
安全基地

